

二本の楓

エフゲーニイ・シュヴァルツ 作

能美武功 訳

城田俊 監修

登場人物

ヴァシリーサ

フョードル

エゴールシユカ

イヴァーヌシユカ

バーバ・ヤガー

熊

カタフェーイ・イヴァーノヴィッチ (訳註 猫)

シャールク (訳註 犬)

ねずみ

第一幕

(二本の若い楓の木が、森の中の野原に、並んで立っている。静かな明るい朝。しかし、さっと風が通り過ぎると、まるで目が覚めたかのように、右側の楓が身震いする。そしてその頂上の部分が、左側の楓に話しかけるかのように傾く(身を寄せかけるようにする。)。そして楓が人間のように話す。)

第一の楓 フェーチャ、おい、フェーチャ。起きるんだ。風が吹いてきた。

第二の楓 静かにして、エゴールシユカ兄さん。丁度夢に

ママが出て来ているんだ。

エゴールシユカ ママに訊いてくれ。僕等を捜してるかって。

フョードル 捜してるって言ってる。

エゴールシユカ これも訊いて。僕らが家出したのを、今じゃもう許してくれてるかかって。

フョードル 許してるって言ってる。

エゴールシユカ 訊いて。僕らがバーバ・ヤガーのために、楓に変えられちゃったこと知ってるかって。

フョードル 大丈夫、いつかは道で会える筈、って言ってる。(旅をすると色々起こるからね、と言っている。)

エゴールシユカ 訊いて。まだ僕達、長いことここで辛い目にあわなきゃならないのって。

フョードル ママ、ママ！ 僕達まだここで辛い目にあわなきゃならないの？ 消えちゃった。僕、目が覚めちゃったよ。お早う、兄さん。

エゴールシユカ お早う。泣くんじゃない。子供じゃないんだ。

フョードル 僕、泣いてない。朝露だよ、これは。

エゴールシユカ こんないい天気になんか泣く奴があるか。草も木も生き生きしている。はつらつとしているじゃないか。元気を出すんだ。

フョードル 元気だよ、僕。僕は信じているんだ、今すぐにもママがやってきて、声が聞けるぞって。フョードオール。エゴールシユカ！

エゴールシユカ あれっ？ こだまかな？

フォードル 何だ、これは。バーバ・ヤガーの奴が、こんなに悪賢いってことを忘れてた。僕等の声を聞くことが出来るものは何も無い筈なんだ。人間だって、鳥だって、けものだって。それどころか、水だって、草だって、木だって、それにこだまだって、僕等の声は聞こえない筈だ。

声 エゴールシユカーアアア。フォードオール。

フォードル 兄さん、黙って。答えちゃいけない。あれはバーバ・ヤガーだよ。僕らを苛めてやろうっていう、涙を流させてやろうっていう腹なんだ。どんな声だって、あいつには真似が出来るんだから。

声(非常に近くから。) エゴールシユカー、フェーチェンカー。世界中搜してるのよ。ママよ。だけどまだ分からないのよ。

フォードル ママだ。バーバ・ヤガーはあんなにうまくない。それにあんなに優しい声は出せっこない。ママ、ママ。ほら、僕らここに立っているんだ。枝をほら、揺すってるんだ。

エゴールシユカ 葉っぱをガサガサ鳴らしてるんだ。

フォードル ママ！ ママ！

エゴールシユカ 行っちゃった！

フォードル いや、立ってるよ。まわりを眺めてる。行っちゃわないだろうな。

エゴールシユカ あ、振り向いた。こっちに来る。急いで、こっちに来るぞ！

(野原に、四十歳ぐらいの、背の高い、がっしりとした女、登場。肩には袋。帯には剣。ヴァシリーサである。)

フォードル ママ、ママ！ ママ、なんて悲しそうな顔をしているの。

エゴールシユカ それに髪の毛・・・あんなに白くなって・・・

フォードル でも目はあんなに優しい。

エゴールシユカ それから帯に・・・ほら、お父さんの剣だ。

ヴァシリーサ フェーチャ、エゴールシユカ、可哀相な私の子供達。二年間、私は歩き回った。休んだことなど一度もない。どうしたんだろう。急に休みたくなるなんて。子供達が見つかったみたい。

フォードル ママ！ 僕らはここにいます。

エゴールシユカ ママ！ 行っちゃ駄目だよ。

ヴァシリーサ この二本の楓の木、葉っぱがサワサワ鳴っている。優しい音。心が慰むような。ここなら安心して休めそう。(袋を肩から下ろす。石の上に坐る。) あらまあ、この真夏に毛皮の外套を着て歩いている人がいる。おい、そのひと、貴方、だあれ？

フォードル ママ、やめて。

エゴールシユカ あれは熊なんだ、ママ。バーバ・ヤガーが鎖でつないだ・・・

ヴァシリーサ おーい、そのひと。こっちに来てー。

(熊、うなり声をあげながら、野原に走って登場。)

熊 俺は恐ろしい熊だぞ。それを態々呼ぶ奴は誰だ。身の毛もよだつような恐ろしいことをしてやるぞ。空が真っ赤に焼け焦げるような。(ヴァシリーサを見る。釘づけになった

ように立ち止る。(ああ、可哀相に！おばさん、何故こんなところに？ ここには誰も来ないんだ。だから安心してたのに。だって人を咬んだりしちゃういけないだからね。がぶつと咬んだりしちゃ。そんなことは本当は嫌いなんだ。僕はやさしい熊なんだ。

ヴァシリイサ そうなのね。安心していいのね。咬んじやいやだよ、熊さん。

熊 そんな。咬みやしないよ。かまないもんだから僕はバーバ・ヤガーに雇われているんだ。

ヴァシリイサ どうしてそんなことに？

熊 単純な話だよ。犬と猫が人間に飼われていた。だけどその人、年をとってきて、よくあること、誰にでも起こることだけど、急にその二匹に暇を出しちゃった。可哀相に、二匹とも食べるものがなくてうるつくようになった。どうしたらいいんだ。僕は仕方がないから、食べさせてやったさ。だけど三匹で食べたんじや、すぐ蓄えはなくなっちゃう。仕様がなからバーバ・ヤガーのところへ行つてね、黍(きび)をわけてくれて、一ブード(訳註 訳十六キログラム。)ばかりね。そして僕は一年間奴隷の身。この誇り高き熊さんがだ。

ヴァシリイサ 奴隷って・・・じゃ、鎖は？

熊 あんなもの切っちゃったさ。僕は力はめつぼう強いんだ。

ヴァシリイサ それでまだずつと奴隷の身？

熊 もうすぐで丸三年だ。それなのに放してくれない。

「契約期間は過ぎたはず」と言いに行くとバーバ・ヤガーの

奴、決まって僕の頭をこんがらがらせてしまつ。変な計算をするんだ。そしてまた奴隷の身。可哀相な話！

ヴァシリイサ 可哀相な熊さん！

熊 僕のことよりおばさん、自分のことを心配しなきゃ。

(ほえる。) ああ、おばさん、おばさん。あつという間にやられちゃうよ。僕は指一本触れないよ。だけど、バーバ・ヤガーが。

ヴァシリイサ 泣かないで、熊さん。今、蜂蜜を御馳走するから。

熊 いらぬ。こんなに悲しんでいる時に、何を貰ったつて慰められはしないや・・・え？ 蜂蜜って？ 何の？

ヴァシリイサ (袋から鍋を出す。) ほら見て！

熊 菩提樹の蜂蜜か。頂戴、頂戴。全部頂戴。どうせおばさん死んじやうんだ。同じじゃない。

ヴァシリイサ 全部は駄目。息子達におみやげとして持つて来たんだから。

熊 で、何処にいるの、その子供達？

ヴァシリイサ それが、何処に行つたのか。

熊 行方不明？ 可哀相に。何時？ どうして？ どうなつて？

ヴァシリイサ さあ食べて。食べながら聞いて。最初からきちんとお話ししましょう。私の夫は英雄ダニール。あなた、大蛇のガルイニツチ(訳註 ルにアクセントあり。)のこと、聞いたことある？

熊 聞かなくてさ！ 嫌な奴だよ。面白半分、僕のおじいさんに、通りがかりざま急に火を吹きかけたんだ。全

くいやな奴なんだ。

ヴァシリイサ そのガルイニツチの蛇を退治したのが、私の夫、英雄ダニラよ。だけどその戦いで自分も死んだの。それから私の家族は四人。私と三人の息子・・・フォードル、エゴールシユカ、それにイヴァーヌシユカ。フォードルが十三歳になった時だった。あの子、放牧していた山羊の群を囲いに入れるために出て行った。(そうしたら山羊達と諍(いさか)い)・・・群を率いている雄山羊は強かった。野生の山羊と同じ。後足で立ち上がって、フェーヂャに襲いかかった。でもフェーヂャはその角を掴んで倒してしまった。そして家に帰って来て言った。「ほらほら、ママ、僕は英雄なんだ。」だって。「何を言ってるの、フェーヂャ。お前がどうして英雄なの。力もなければ技術もない。それに読み書きが出来もしない。敵はお前の年なんか考えちゃくれないよ。お前の弱みをついてくるだけさ。私が手伝ってやらなきゃお前、馬の蹄鉄も替えられない。別れ道に出て、石にそれぞれ道の行く先が書いてあっても、読めやしない。英雄だったら、馬を飛ばしながらいちいち下りたりしないで、馬上から読み取って正しい道を選ぶのよ。お前には出来やしないだろう? 間違っただけさ。だからまだ待つよ! その時は必ず来ます。その時になったら私が自分で出してやるんだから。」

熊 え? どこへ?

ヴァシリイサ 強きをくじき、弱きを助けるため。

熊 立派なことじゃない。

ヴァシリイサ そう。立派。これ以上ないくらい。でもあ

る朝、旅人があの子の刀を持って来た。刀を背負う負い草が擦り切れて刀が落つちたのね。それなのにあの英雄さん、気がつかなかった。それから三日後、あの子の乗っていた馬も帰って来た。馬の扱いも悪かった様子。毛の手入れはしてないし、水も浴びさせていない。かいはも充分与えていない。フォードル ああ、ママ。僕、敵はいないかと、それしか考えていなかったんだ。

ヴァシリイサ それで息子は帰って来なかった。

熊 ああ!

ヴァシリイサ 三年たった。エゴールシユカが十三歳になった。牡牛があの子に襲いかかった。あの子は牛の鼻面を捕まえて、鎖に繋いでしまった。そして私のところにやって来た。「ママ、ほら見てご覧。僕は英雄なんだ。」そして夜中に家を逃げ出した。四十日たって、馬だけが帰って来た。鐙(あぶみ)はカラカラ鳴っていた。でも鞍には誰も乗ってない。馬は私をじっと見て、涙をポトリとこぼした。それからばかり倒れて死んでしまった。

エゴールシユカ あの馬は、僕に何が起こったのか知っていたからなんだ。

ヴァシリイサ どうしたらいいのだろう。私は捜しに行くことにした。家のことは全部、その年十(とお)になったばかりの、イヴァーヌシユカにまかせて。

熊 で、もう捜し始めて相当たつ?

ヴァシリイサ もうすぐ丸三年。

熊 えっ? 三年も。それじゃ、たとえ会ったって、今じゃ顔が分からない。

ヴァシリイサ それは必ず分かるの。何の意味もなく家から飛び出すような子供、そんな子が大きくなる筈がない。年をとる筈がない。二人とも今は、十三歳。

フォードル 本当だ、ママ。

エゴールシユカ そうだ、僕とフォードルは今、同（おな）い年なんだ。

ヴァシリイサ 探し捜しているうちに、この鬱蒼とした森に着いたの。ねえ、熊さん。あなた、私の息子達の噂、聞いたことない？

熊 訊かないで。黙って。でないとおのぼつたり倒れた馬みたいに、僕もぼつたり死ななきゃならない。悲しみのためにね。おばさん、可哀相だけど、僕は力になれないな。

フォードル それは本当だ。

エゴールシユカ 僕らが楓に変えられたのを見てはいないからな。

ヴァシリイサ そう。じゃバーバ・ヤガーに直接訊くしかないわね。そこへ連れて行って頂戴！

熊 今は家にいないよ。夜遅くならなきゃ帰って来ないって。

ヴァシリイサ それで、家はどこ？

熊 どこって・・・にわたりの足の上にある家だから・・・今日はここ、明日はあっち・・・にわとりはああですからね。

こつちに行つてはひっかきまわし、あつちに行つてはひっかきまわし。

ヴァシリイサ さあ、その小屋を捜しに行きましょう。うちの子がそこに隠されているかもしれない。

熊 なんだ、捜すことはないや。あつちからやつて来るよ。トー、トー、トー。

（騒音。コツコツコというにわたりの声。おんどりのときの声。森から小屋が出てくる。四つの角に二本づつ、にわたりの足が出ている。ヴァシリイサ、小屋に近づく。）

ヴァシリイサ バーバ・ヤガーさん、あんた随分ふとつぱらね。怖くないの、こんな家に住んで。不用心ね。鍵もついてないのね。

熊 ないです。あの足を信用しているんです。誰か来れば蹴つとばしますからね。

ヴァシリイサ 蹴られたら、ふつ飛ばされるの？

（小屋に近づく。にわたりの足、しきりに蹴る。）
ヴァシリイサ 親切に話しかけたらどつかしら。

熊 やつてみたら？ 生まれてからこのかた、そんな風にされたことはない筈ですからね。

ヴァシリイサ コツコツコー、にわとりさん。あなた方綺麗ね。庭が引き立つわ。目のたのしみよ。聞いて、にわとりさんの歌。私が作ったのよ。

コケコツコー、にわとりさん。

可愛い、綺麗なにわとりさん。

誰でもあなたを見るものは、自然に心が慰むの。

自然に見惚れてしまうのよ。

あなた、本当の正体は、

鷲ではないの、天かける。

火の鳥じゃないの、情熱の。
女王じゃないの、海のかなたの。
鶏小屋はただ飯の住みかだ。

真ん丸い目
強い羽根。

庭を歩くその姿。

まるで大海原を泳ぎ回って
いるかのよう。

脇に退きたまえ、諸君。

にわとり様のお通りだ。

とさかの冠も堂々の、

われらの王、にわとり様だ。

(この歌を聞き、最初はにわとり達、ためらう。次に、踊り始める。歌を歌い終わってヴァシリーサ、小屋に近づく。足は大人しくなっている。)

ヴァシリーサ そう。それでいいの！

(扉、さつと開く。扉のうしろ、肘かけ椅子に、バーバ・ヤガーが坐っている。)

熊 バーバ・ヤガー！ 意地悪！ 悪党！ 何でまたここに！

バーバ・ヤガー 黙りなさい！ でないと食べちゃうよ。召使いは主人を見たら喜ぶもんだ。主人に怒鳴るとはな。

(地面に飛び降りる。小屋に向かって。) 下がってよい！
(小屋、退場。)

バーバ・ヤガー よく来たな、ヴァシリーサ。待つてたよ。
ヴァシリーサ 待つてた？

バーバ・ヤガー 随分長いことね。待つてた甲斐があったよ、こうやって捕まえられたんだから。このバーバ・ヤガー様はお利口なんだ。頭が働くのさ。ずるいきつね、悪賢いハイエナなんだ。

ヴァシリーサ そんな自分をお前さん気に入っているのかい？

バーバ・ヤガー 当たり前でしょう。この自分が気に入ってなくつてさ。この可愛い可愛い自分を。だから強いんだ。

お前達みたいはどうせろくでもない奴等は、お互いに愛し合うんだ。だが私は自分で自分を愛する。自分のことは見ても見飽きないのさ。お前達にはいくらでも心配事がある。近所の人達たの、友達のことだの。私は自分の事だけだ。心配事6

などない。だから私はいつでも勝つ。(鏡を見る。) おお、

おお、可愛い可愛いお前さん。何が欲しいんだい？ お茶かい？ お水かい？ そつかい、お水かい。井戸からか？ 沼

からか？ そつか、沼の方がいい。そうだな。あれは沼の臭いがするからな。ヴァシリーサ、沼までひとつ走り行って

くれ。バケツに一杯水をくんで来るんだ。

ヴァシリーサ あんたの召使いじゃないんだ、私は。

バーバ・ヤガー 言うことをきくんだ、言うことを！ 私

は人を捕まえるのが上手だよ。一人が引つ掛かると後を追つてまた別の引つ掛かる。前の奴を助けに来るからね。兄が弟を助けるに、母親が息子を助けるに、友達が友達を助けるに、と

ここでお前さん、何をやらせてもつまいていつ話だね。

ヴァシリイサ これて三人の息子を育てたからね。習えるものは何でも習った。

バーバ・ヤガー そういう働き手が欲しかったんだ。子供を助けて、家に連れて帰りたかつたら、私の言うことをきくんだ。そのうちお前の働きに私が感心して、褒めるかもしれない。いいかい、その私がお前を褒めた時、それが子供を連れて帰ってよい時だ。どこへなりと連れて帰っていいんだぞ。

熊 こいつに雇われちゃ駄目だ。こいつが人を褒める？ とんでもない。そんなことありっこない。自分しか褒めやしないんだ。

バーバ・ヤガー 黙ってる！ お前に何が分かる。

熊 何でも分かかってるよーだ。

バーバ・ヤガー 馬鹿！ 私を見てうっとりするような奴でなきゃ、私に分かる訳がない。そうだろうが、ヴァシリイサ。な？ いいか、今から仕事を言い付ける。それをやるんだ。やろうとするんだ。その働きに対して、私がただ一度でもいい。「よくやった。」と褒めれば、はっはっは、お前の子供達は自由の身だ。いい考えだろうが。な？ ヴァシリイサ。

ヴァシリイサ 仕事をして私はいつも危難を免れてきたのだ。やってやる！ 痩せ我慢出来なくなつて多分褒めてくれるさ。だけど、子供はここに居るのか。ちょっとだけでもいい。顔を見せて欲しい。私を騙してはいないと示してくれ。

バーバ・ヤガー 見せることは出来ぬ。なにしろ閉じ込め方が見事だね。うん、声だけは聞かせてやろう。私の命令だ。私の許可だ。子供達、母親と話していいぞ。（風を起すよ

うにフーツフーツと息をはく。）

（二本の楓、サラサラと音を立てる。）

フョードル ママ、ママ、僕達を置いて行かないで。

エゴールシユカ 僕達身体は大きくても、小さい子みたいに苦しい目にあっている。

ヴァシリイサ ああ、フョードル、エゴールシユカ。何処なの。

バーバ・ヤガー 黙れ。答えてはならん。もう口はきいた。それで充分だ。

（サラサラいう音止る。楓、黙る。）

バーバ・ヤガー どうだ、ヴァシリイサ。留まるか。

ヴァシリイサ 留まる。

バーバ・ヤガー そうか、そいつはこっちに好都合。じゃ、さらばだ、女中。私は忙しくてな。じつと家に坐つて女中など話している暇はない。どこでも私を待っている。あつちでは盗み、こつちでは殺し、そつちでは無実の人間を迫害。こつちの仕事はどうしたつて私が一枚加わらなくつちやね。じゃ、さらば！

ヴァシリイサ さようなら、バーバ・ヤガー。

（バーバ・ヤガー、騒音、口笛の音とともに消える。と、すぐまた地の底からか、どこからか、再び現われる。）

バーバ・ヤガー いいか、私のいない間に家を片付けておくんた。見てさっぱりした気分になるよつにだぞ。

ヴァシリイサ 分かりました、バーバ・ヤガー。片付けておきます。

バーバ・ヤガー さらに、ヴァシリイサ。（騒音、口笛

とともに消える。と、すぐまた現われる。(仕事の出し方が少なかったな。あんなもんじゃ怠け癖がつく。この辺り三百箇所に、三百年前、三百の宝を埋めておいた。だけど埋めた場所がもう分からぬ。そいつを全部捜すんだ。ちゃんと数えて、びた一文違わぬように私に見せるんだ。いいか。さうばだ。

ヴァシリイサ さようなら、バーバ・ヤガー。

(バーバ・ヤガー、消える。と、すぐまた帰って来る。)

バーバ・ヤガー 仕事が少し少なかったな。あれじゃ身体がなまくらになつてしまふ。倉にライ麦三百ブード、小麦三百ブード、入れておいたのが、ねずみに袋を食い破られて、ライ麦、小麦、ごちゃごちゃだ。お前はそれを選び分けて、小麦で粉を作るのだ。だからこの次私が家に帰って来る頃にや、金はいっぱい、食糧はいっぱい。そうなりや私だつてお前のごちを褒めないこともあるまいよ。では、さらばだ。

ヴァシリイサ さようなら、バーバ・ヤガー。それでお帰りは何時?

バーバ・ヤガー 明日の夕方だ。はっはっは。

熊 明日の夕方までにあんな大仕事を! この人に出来ると思つてるんですか。あなたには良心なんか無いんだ。

バーバ・ヤガー そう。良心はないね、昔も今も。はっはっは。

(騒音、口笛の音。炎と煙とともに消える。)

熊 飛んで行った。あそここの木の天辺を曲がつて。何をしましよ。一緒に泣きまじしよか?

ヴァシリイサ 猫と犬をあな、家に住まわせていたわね。

きつと手を貸してくれるわ。行きまじしよ。

熊 あ、わざわざ行かなくても、あつちから来た。(呼ぶ。)
おい、シャーリク、(訳註 これが犬の名。)
こつちへ来い。用事がある。走つて来るんだ。シャーリク! カタフェーイさん、あんたもこつちだ。猫の奴には丁寧な言葉を使つて下さいね。あいつはへそまがりだから気を付けないと。ミャーミャーと呼びかけても、知らんふりをするところがあるんです。ヴァシリイサ それはこわいわね。

熊 シャーリク、何処だ。カタフェーイさん、こつちへどうぞ。

(シャーリク、走つて登場。初老。しかしまだ豊饒(かくしゃく)としていて、強そうな犬。毛はあざみのいがだらけ。野原を疾走して来る。)

シャーリク 誰だ、木をサラサラ言わせている奴は。この土地じゃあ、木をサラサラ言わせたりはさせんぞ。おい、このシジユウカラ! あの熊さんをじろじろ眺めたりしちゃうか。あの熊さんは俺の主人なんだぞ。それから、あの切り株に坐つている奴は誰だ。よそものは許さん、よそものは!

熊 こつちへ来い、シャーリク。用事がある。

シャーリク 駄目だ、ご主人殿、ちゃんとこの辺りを統括してからでなきや。これが私の決まりなんだ。ガウー、ガウー、ガウー。さてと、これでおわり。お早うござる、ご主人殿。ご壮健にてあれせられ、恐悦至極に存じ候。ルルルル。で、これは誰? ルルルル。

熊 素敵なおばさん、ヴァシリイサ。

シャーリク ルルルル。ご免なさい、素敵なおばさん、

唸ったりして。でもこれしかないの、出だしは。これが私の決まりなんだ。ルルルルル。これでよしと。お早うございます、ヴァシリイサ。

ヴァシリイサ お早う、シャーリク。

熊 今からこのおばさんが用事を言い付ける。それをやるんだ。

シャーリク 合点だ、ご主人殿。

ヴァシリイサ 三百の場所に三百個、バーバ・ヤガーが宝を埋めたって。それを全部捜せば私に息子を返してくれる。私を助けて、犬さん。あなたの嗅覚が私達より鋭いんだから。

シャーリク こいつはいいぞ、宝捜しか。鼻を使った狩猟だな。さあ、地面に鼻を向けて、森中を捜すんだ。ガウー、ガウー。

ヴァシリイサ 待って、待って。宝捜しは夜にするの。昼は見張りを願うするわ。バーバ・ヤガーが帰って来て、仕事の邪魔をする困るから。

シャーリク それも名案。

ヴァシリイサ で、カタフェーイさんは？

声 ほら、さつきからこの樫の木の後ろに立っている。

ヴァシリイサ どうしたの。何故こっちに来ないの。

声 賢い猫は、どこに入る時にでも、必ず辺りを三度見る。

(木の後ろからゆっくりと、大きなふさふさした毛の猫が現われる。)

ヴァシリイサ あらまあ、あなた、シベリアの猫じゃない？

カタフェーイ そういふ噂もあるんだけど……

ヴァシリイサ 猫のパユーン……あの大きな猫、お話の

上手な猫……あの猫、あなたの親戚じゃない？

カタフェーイ だったらどうかした？

ヴァシリイサ 何でもないわ。ただ聞いただけ。

カタフェーイ あれはひいおじいさん。

ヴァシリイサ じゃあなた、きつと名人ね。ねずみを取るのも、お話をするのも。

カタフェーイ だったらどうかした？

ヴァシリイサ 何でもないわ。ただ聞いただけ。

カタフェーイ 名人さ。

ヴァシリイサ じゃあなた、やってくれないかしら、森中のねずみを、あの納屋に追い込むこと。

カタフェーイ 出来ないよ、そんなこと。

熊 カタフェーイ！ 人間様の言うことが聞けないって言うのか。

カタフェーイ お利口な猫は三度目にしか承諾しない。それが決まりなんだ。ねずみを納屋に追い込むなんて、するもんか。エー、分かりました。やりましょう。

ヴァシリイサ 納屋に追い込んだら、ライ麦と小麦を選び分けるよう言い付けて。分かったね？

カタフェーイ 言い付ける？ いやです、いやです。エー、分かりました。やりましょう。

ヴァシリイサ ねずみ達が選り分けている間、あなたは面白いお話を話して聞かせるの。おかしがって笑うように。そうすれば麦は食べられないからね。

カタフェーイ ねずみ達に話を聞かせる？ そいつは駄目だ、そんなこと誰がするもんか。うん、分かった。ええ、や

りましょう。

ヴァシリーサ　今のは夜にやること。昼の間はね、カタフェーイ、バーバ・ヤガーがあたりをうるついでにはいいか、聞き耳を立てていて頂戴。

カタフェーイ　これは聞く。(三度目じゃなくなつたつて。だつて、)猫というものは普段から聞き耳を立てているものですからね。

ヴァシリーサ　犬さんと猫さんにここはおまかせして、私と熊さんは、森へ行って風車を見てきます。小麦を粉にひけるように。トットトットトット、トットトットトット。

(とり足の小屋、登場。)

ヴァシリーサ　さあ、乗つて、熊さん。

(二人、並んで小屋に坐る。)

ヴァシリーサ　よし、出発!

(ギャロップで小屋、二人を連れ去る。)

シャーリク　ガウー、ガウー!　僕も乗せて行つて!

カタフェーイ　ここで待つんだ!

シャーリク　ご主人様が僕を連れて行つてくれないと、僕、いやなんだよー!　生きるのもいやになつてくるんだよー!

カタフェーイ　ここで待つんだ!

シャーリク　僕に怒鳴るんじゃない!　お前、人間じゃないじゃないか。

カタフェーイ　いいか、私はご主人様の代わりなんだ。

シャーリク　僕もだ。僕もだ。

カタフェーイ　仕事をほうり出して逃げ出す。フン、ご立派なご主人様だ。

シャーリク　逃げ出したんじゃない。ちゃんとここに残つたじゃないか。分かつたから、もうそんな怒つた顔をして僕を見ないでくれよ。友達が怒つて僕を見ると、がっくりくるんだよ!　カタフェーイさん、熊さん、握手しようよ。

カタフェーイ　ちよつと君、離れて。何か臭うな。犬の臭いだ、これは。

シャーリク　そうか。じゃ、今日は雨だな。

カタフェーイ　何が雨だ。ちゃんと身体を舐めて、綺麗にしとくんのだ!

シャーリク　君達は一日に百回も身体を舐めるけど、僕らにはそういう習慣がないんだ。僕は……

カタフェーイ　しつ。誰か来る。

シャーリク　どっちから?

カタフェーイ　森の方からだ。

シャーリク(鼻をくくん言わせる。)人間だな。えらい勢いだ。恐ろしそうな音だな。

カタフェーイ　何か叫んでる。ドスン、ドスン。足音だ。

シャーリク　噛みついてやらなきゃいかんな。

カタフェーイ　どんな怪物だろう。まづ観察だ。この茂みに隠れよう。

(隠れる。陽気な声が力いっぱいに歌う。

「僕はイワン……」

泣き事言わん。」

野原に、十三歳ぐらいの、それほど背の高い男の子、登場。そのまま歌い続ける。(

子供

子供

子供

子供

子供

僕はイワン

泣き事言わん！

僕はママを捜してる。

その途中なんだ。

だから誰にも触らない。

暴れたりもしないんだ。

口笛も吹いたりしないのさ。

ママを捜して一直線。

ママは僕にさよならを言って

そのまま帰ってこないんだ。

ほんとにどこかへ行っちゃった。

前人未踏の草原へ

僕はイワン、偉いんだ

僕はイワン、強いんだ。

エゴールシュカ（半分囁き声で。）イワン、早く逃げるんだ。でないとも木にされちゃうぞ。

フョードル（半分囁き声で。）あいつには聞こえないさ。風が弱すぎだよ。それに、聞こえたって、分かりやしないんだ。

イヴァーヌシュカ 藪の中で、何か言ってるのは誰だ。出て来い！

シャーリク（藪の中から。）ルルル

イヴァーヌシュカ（喜んで。）あ、犬だぞ。嬉しいな。ワ

ン、ワン。こっちへ来い。何ていうんだ、名前は？

シャーリク ルルル。シャーリク。

イヴァーヌシュカ 姿を見せてくれよ、怖がらないで。僕

は嬉しいんだ、たとえ君がこの僕を信用してくれなくてもね。

まるまる一箇月、ただ歩くだけで、狼以外は出会ったものがないのさ。狼とじゃ話は出来ないからね。狼はこちらに気がつくよ、こそこそ逃げちゃう。

カタフェーイ 冬だったら、狼だって話してくれるさ。

イヴァーヌシュカ 冬まで待ってっていうのかい、猫君。姿を見せてくれよ。あ、藪の中からも目が光っているのが見えるぞ。これは嬉しいや。シャーリク、シャーリク。出てこいよ。

シャーリク（藪から出て来る。）ああ、イワン、イヴァーヌシュカ。どうして君、ママのことを（許しも得ずに）勝手に追っかけ回しているんだい。殴られちゃうぞ。

イヴァーヌシュカ 殴られるって？ 何の話だい。英雄は

殴られたりしないだろ。僕は今武者修業中の剣豪なんだ。

カタフェーイ 誰だい、そんな事、言ったのは。

イヴァーヌシュカ 僕が自分で。だって、そうらしいんだから。

カタフェーイ もっと身体が大きくなきゃいけないんじゃないか、英雄ってのは。

イヴァーヌシュカ 身体じゃないよ。勇気が問題なのさ。

僕は今まで生きて、いろいろ見てきた。そして突然分かったんだ。自分を怖れない人間、そんな奴は怖れるに足りないってね。そこが分かるということは、僕は英雄だっていうことなんだ。

（カタフェーイ、藪から出て来る。）

イヴァーヌシュカ あ、君、猫君。君、奇麗だねえ。

シャーリック で、僕は？ ねえ、僕は？

イヴァーヌシユカ（猫に。）ちよっと撫でさせてくれないか。

シャーリック ね、僕も。僕も。

イヴァーヌシユカ そりゃ勿論君もだ。綺麗な猫君。利口な犬君！ 君達、僕のママを知らないかい？ ママはね、ヴァシリーサっていうんだ。あれ、咽を鳴らすのを止めたね。どうしたんだい、猫君。

カタフェーイ 私はね、名前はカタフェーイ・・・さん。

イヴァーヌシユカ どうしたんだい、カタフェーイさん。どうしてそんな顔をして僕を見るんだ。

カタフェーイ 言ったものだろうか、言わないもんだろっか・・・と。

イヴァーヌシユカ 話して、話してよ。頼むよ。ママがいなくてどんなに淋しいか、君達にも分かるだろう？

シャーリック 話すしかないな、どうやら。

カタフェーイ ここにいるんだ。君のママは。

イヴァーヌシユカ こりゃ大変！（さっと藪に隠れる。）

カタフェーイ たいした英雄だ！ ママと聞いて隠れちゃうとはね。

シャーリック ママがいなくて淋しかったと言っていたくせにね。

イヴァーヌシユカ（藪から覗きながら。）勿論淋しかったさ。だけど、「家にいなさい」ってママに言われてたのに出て来たんだ。僕のことを見たらきつと悲しむよ。駄目、駄目。

僕は姿を見せない。

カタフェーイ じゃ、どうして出て来たりしたんだい。

イヴァーヌシユカ 隅っこからでもいい。ママを一目見たくて。ママの声をちよつとでも聞きたくて。近くに隠れていて、だんだんと勇ましいことをやってのける。ママを助けるんだ。そうか。ママはここにいる。僕のこととはみんな許してくれる筈。ママは今どこに？

シャーリック 僕らの大事な大事な親分、熊のミハイ口様と一緒に、風車を見に行ってる。何だか予感がするな、もうすぐ帰って来るんじゃないか。

イヴァーヌシユカ 風車？ ママに何の用があるのかな。

カタフェーイ バーバ・ヤガーがママに無理難題を出したんだ。それを期限内に全部やってのければ、二人の子供は返してやるうってね。フョードルとエゴールシユカを。

イヴァーヌシユカ えっ？ 兄さん達、いるのか、ここに？

それはすごいや。

カタフェーイ 喜ぶのはまだ早い。いるって言っても、うまく隠されちゃってる。僕が耳をすましても聞こえないし、シャーリックがくんくんにおってもにおわないようにね。

イヴァーヌシユカ 捜せばいい！

シャーリック それは捜せばいいさ。でもすぐには駄目。でもとにかくいつたんはママに会って、ママの気持ちを慰めなくっちゃ。

カタフェーイ ママのお守りなしだと、弱虫になっちゃうのかな？

イヴァーヌシユカ 何を言ってるんだい。僕は英雄なんだぜ！

シャーリック それは分かってますよ……でも……

イヴァー又シユカ いやいや、君達。ママにはそつでなくとも沢山心配事があるんだ。それに態々僕が来たつていうことをつけ加えることはないさ。分かったね。話しちゃ駄目だよ。言うことをきくんだよ。

シャーリック そつだな。言うことをきかなくちゃならないか。君は小さいけど、やっぱり人間なんだからね。

(轟音が聞こえる。)

カタフェーイ あ、風車を修繕するために、材木を切り出しに行つたんだ。野原の所で積み上げているんだ、あれは。

イヴァー又シユカ 隠れよう! (隠れる。)

(ヴァシリールサと熊、登場。)

熊 おお、猫君と犬君。これは本物の仕事だぞ。鎖で繋がれて、ただ通行人に吠えるなんて、そんな仕事じゃない。名誉ある、楽しい仕事なんだ。ほら、来て見てご覧。すごい材木だろう?

ヴァシリールサ そんな時間はないの! 熊さん、あなた、あの道路が三股になっているあそこまで、ひとつ走り行って来て。あの鍛冶屋のクジマーのところまで。あの人のこと、知ってるわね?

熊 誰でも知ってるさ、あの人なら。どんな英雄でもあの人の世話になっている。馬の蹄鉄は替えて貰うし、兜や鎧の修理はして貰うし。

ヴァシリールサ あの人のところへ行って来て、釘を一ブードくらい、鋸二丁、鉋(かんな)四丁、金槌四丁、借りて来て頂戴。何に使つのか説明するのよ。すぐ貸してくれる筈よ。

熊 合点承知。(走つて退場。)

ヴァシリールサ 少し私、横になろつ。今夜は徹夜で働かなきゃいけないんだから。

カタフェーイ ゆっくり寝て。僕らが見張つてるから。(茂みに隠れる。)

ヴァシリールサ 楓がさらさら鳴っている。なんて優しい音が静まってくる。自然に目が閉じてくるわ。(目を閉じる。)

(次第に暗くなる。ずつと遠くから見張りが点呼をとるように、次の声が聞こえる。)

シャーリック ガウー、ガウー。聞くんたぞー。

カタフェーイ ミヤウー、ミヤウー、見るんだぞー。

(茂みからイヴァー又シユカ、出て来る。静かに静かに歌う。二本の楓、それに声をあわせて歌う。)

イヴァー又シユカ

ゆっくり眠つて

お母さん

昔ママは僕達に

子守歌

歌つて寝かせて

くれたね

フェーチャとエゴールシユカ

僕達は今三人で

その同じ歌を歌うんだ

三人

ゆっくり眠つて

お母さん

ママは僕達の

あとを追って

夜も寝ないで

歩いたんだ

僕らの為に急ぎに急ぎ

僕らの為に足は棒に

両手は疲れ

心も挫けそう

ママ、僕らの為に

力を取り戻して

元気をつけて。

ゆっくり眠って

起きないで

おやすみなさい

お母さん

(幕)

第二幕

(第一幕と同じ舞台。但し野原は見違えるほど変わっている。

道路が作られ、砂が蒔かれている。風車が立ち、軽快に羽根

が回っている。風車の傍に木造の家。その軒下に小麦粉と麦

の袋。その隣にもう一つ木造の家。その軒下に金の入っている

袋。カタフェーイが麦の袋の傍でウロウロしている。)

カタフェーイ 頑張れ、頑張れ、ねずみ君達。あとたつた

半袋だ。これをより分けておしまいだぞ。

小さな声 やってます。やってます。より分けてますよ。

ただね猫さん、お話をお願い。でないと歯がむずむずしちゃう
て。袋まで齧(かじ)ってしまつ。

カタフェーイ そうか、じゃ聞いてくれ、ねずみ君達、猫
に一番の友達、ねずみ君達。

(小さな笑い声。)

カタフェーイ 昔昔、三匹のねずみがいました。一匹目は

赤、二匹目は白、三匹目はぶち。(小さな細い笑い声。)

三匹はともともも団結していて、猫も怖がったくらいでした。

(笑い声。)

ある時猫が白ねずみを待ち伏せしていた。そし
たら赤ねずみが猫の足に、ぶちねずみが猫の髭に、攻撃さ。

(笑い。)

カタフェーイ 猫はぶちねずみを追つかける。すると今度

は白ねずみが尻尾に、赤ねずみが耳に、攻撃だ。

(笑い。)

カタフェーイ どうしたらいいだろう。猫は考えた。そし
て、兄弟二人を呼んだんだ。二人、呼んだんだ・・・ええ？

どうして笑わないんだい？

小さな声 笑うどころじゃないでしょう。

カタフェーイ けしからん。笑うんだ。笑わないと、ひど

いぞ。

(ねずみ、いやいや無理に笑う。)

カタフェーイ 猫は二人の兄弟を呼んで言った。いいか、

兄弟、ねずみのやつが僕を馬鹿にしたんだ。助けてくれ。僕

は赤毛だ。だから赤いねずみを捕まえる。お前は白い。だか

ら白のねずみ、それからお前はぶち。だからぶちを頼む。さ

あ、こうやって僕達は侮辱したやつらに仕返しをするんだ。

ほら、笑え！

(無理に出た笑い。)

カタフェーイ この相談を三匹の仲良しのねずみが聞いていて、悲しんだ。どうしたらいいだろう。どうなるんだらう。そして考えついた。三匹一緒に暖炉に入って、灰の中を転がった。出て来た時は三匹の、灰色のねずみ。

(ねずみ、嬉しそうに笑う。)

カタフェーイ 三匹のねずみは三匹の猫の目の前におどり出た。三匹の猫はぼかんと口を開けて、びっくり。さあ、どれを捕まえたらいいか、分からない。

(大笑い。)

カタフェーイ それからだ。ねずみがみんな灰色になったのは。

(大笑い。)

カタフェーイ それからだ。猫が無差別にねずみを取るようになったのは。

(笑い、出てこず。)

カタフェーイ 笑うんだ！

小さな声 でも、ご主人様、仕事はこれで終了です。もう私達を放して下さい。家では子供達が、親がいないと淋しがっています。

カタフェーイ なんだ、そうか。じゃちょっと見せる。怖がることはない。お前達に触りはしない。キーキー言っんじやない。(袋に近づく。)うん、なかなかよく出来ているな。立派なもんだ。よし、行っていいぞ。向こう一年間、君達には指一本触れないからな。

小さい声 有難うございます。ご主人様。カタフェーイ様。カタフェーイ さあ、行け！

小さい声 さようなら、カタフェーイ様、さようなら。はっはっは、ぶちは尻尾に飛び掛かり、赤は足にかはっはっは。白は耳に飛び掛かり、ぶちは今度は鼻に・・・はっはっは！(遠くになり、声、消える。)

カタフェーイ フー。お話が全部で三百三十三・・・疲れた。

(木の下に坐る。入念に毛づくろいをする。熊、登場。全身粉だらけ。粉屋のよう。後ろにシャーリク。)

熊 おい、あれで終なのか、袋は？

(カタフェーイ、答えない。)

シャーリク あいつに聞いても今は駄目だ。毛づくろいをしてる時には、何も聞こえないんだから。(袋の方に駆け寄る。)出来てる。持って行こう。(熊の背に、二つの袋をのせるのを手伝う。)

熊 太陽はまだあんなに高い。それなのに仕事は終了。すこいぞ！

(熊、走って退場。シャーリク、その後から走って行く。途中から戻って来て、猫の方へ行く。猫のところへ着く前にまた向きを変え、風車の方へ。最後に困った様子で立ち止る。)

シャーリク 風車に行こうよ。

カタフェーイ 行かない。

シャーリク どうしてそうなんだ、君は。いやな奴！(僕は困ってるんだぞ。)(風車で一人坐っている。すると君のことが心配になる。こっちに走って来る。すると熊さんのこと

が心配になる。少しは僕のこの心を思えばかってくれよ。安心させて欲しいよ。一緒に行ってくれないか。三匹一緒にいるんだ。そうすれば、僕は番犬がとまるんだ。

カタフェーイ 無理だ、それは。

シャーリック どうして無理なんだ。

カタフェーイ 僕はここに坐って、ただ毛を舐めているように見えるだろう？ だけど耳には神経が集中しているんだ。で、ずっと何か聞こえてるんだな。

シャーリック ワン、ワン。じゃバーバ・ヤガー？

カタフェーイ まだはつきりしないんだ。でもとにかく、忍び足で誰かが近づいて来ているな。

シャーリック ワン、ワン。大丈夫かな。

カタフェーイ 静かに！ 邪魔しないで。風車に行つてくれ。何かあれば、呼ぶよ。

シャーリック ウーウーウー。傍に寄つて来てみる。足をがぶつとやってやる！ 痩せ足だつて構いはしない。僕は骨なんか平ちゃらなんだ！

(退場。)

(猫、毛のつくろいをやめる。足を一本立てて身体を緊張させる。耳をすませる。かん木が揺すられて、さらさら言う。

猫、木の後ろに隠れる。かん木からイヴァー又シユカ、観客に背を向けて後すさりしながら登場。食事の用意がされたテーブルを引っ張っている。)

カタフェーイ 何だ、イヴァー又シユカ、君か！

イヴァー又シユカ そうだ、吾輩さ。英雄イヴァー又シユカ様さ。

カタフェーイ 何を引っ張つて来たんだい？

イヴァー又シユカ 魚を釣つて、きのこをたくさんとつて、竈(かまど)を築いて、食事を用意したのさ。

カタフェーイ それはお手柄。褒めてつかわす。

イヴァー又シユカ まだ褒めるのは早すぎるよ。一晚中みんな働いて、お腹がすいてるに決まつてる。帰つてみたら食事の用意が出来ている、となつたら大喜びだろうと思つてね。

カタフェーイ ママは見破らないかな。これが君の仕事だつて。

イヴァー又シユカ 見破られつこないつて。ママが出て行つた時、僕はボルシチ一つ作れなかつたんだから。今じゃ僕に出来ない料理なんかないんだよ。

カタフェーイ そうか。じゃ、見せて、どんな料理を作つたんだい。

イヴァー又シユカ ほら、見て。

(イヴァー又シユカ、猫に向きを変える。猫、イヴァー又シユカを一目見て、ニメートルも後ろに飛び退く。無理もない。髪は逆立ち、顔は煤と泥で汚れている。子供ではなく、まるで怪物。)

イヴァー又シユカ どうしたの？

カタフェーイ 自分の姿、見てみた？

イヴァー又シユカ いや。

カタフェーイ 頭の天辺から足の先まで真黒なんだよ。舐めて綺麗にしなくちゃ。

イヴァー又シユカ 汚れるのは当たり前だ。竈が煙つてね。

薪が全然燃えよつとしないんだ。火吹き竹で吹いて吹いて・・・ほつべたがはじけそうだった。

カタフェーイ（テーブルについて。）君、魚はどうやって取ったの？ 掴み？

イヴァーヌシユカ 掴む？ 冗談じゃないよ。釣ったのさ。英雄はね、決してポケットを空にして外へ出たりはしないんだ。ほら、見てご覧、このポケットにないものはないんだ。釣糸、釣針、これは呼びこ。ほら、胡桃（くるみ）、火打ち石二つに、パチンコ。

カタフェーイ しまつて、それは。パチンコは見ていられない。しょつちゆう猫を狙つて、バシン、バシン。

イヴァーヌシユカ 誰がそんなことを？ 子供だよ、そんなことをするのは。僕は英雄なんだよ。

カタフェーイ それはそうだけど・・・

イヴァーヌシユカ 怖がることはないよ。僕は子供の時だつてそんなことしたことないんだ。そうだ、この料理のことだけど、僕が作つたんだつてママに言い付けちゃいやだよ。

カタフェーイ じゃ、どう言おう？

イヴァーヌシユカ 何でもいいよ。適当に話を作つて。君のおはこじやないか。

カタフェーイ うん。そりやそうだな。考えよう。君はもう川へ行った方がいいよ。身体を洗うんだ。

イヴァーヌシユカ それは後だ。後にする。ママが料理をおいしそうに食べるのをこつそり見たいんだ。

カタフェーイ じゃあ、隠れよう。白の音がしなくなったぞ。麦をひくのが終わったんだ。すぐやつて来るぞ。

イヴァーヌシユカ 隠れよう！（隠れる。）

（すぐに熊、登場。袋を担（かつ）いでいる。後ろにシャールク。嬉しそうに跳びはねている。）

熊 やつたぞ。すごい抄（はかど）り方だ。あとはあの小屋を片付けるだけ。それに夕方までにはまだたつぷり時間がある。嬉しいな。足がひとりでに動き出す。足がひとりでに踊り出す。抑えられないや。（踊る。そして歌つ。）

おいおい、僕のおんよ君、

ずいぶん不格好な形じゃないか。

だげどよく、この僕を運んでくれるな。

軽々と。まるで雀を運んでいるように。

僕はどつして飛べないんだ。

何を言つてる、飛べるのさ。飛ばないだけよ。

そんなに慌てて飛ぶんじゃなくて、悠々と、泳ぐように進むのさ。孔雀のように。

おーい、君達、花さん達。

可愛い綺麗な花さん達。

僕は飛んで行くよ、君達の上を。

風のように。

僕は飛んで行く、綿毛のように。

空よりも、もう一寸高い所を。

飛んで行く。ああ、そうだといいのに。

この不格好なおんよ君。

(跳躍を行う。テーブルにぶち当たりそうになる。)

熊 おや、何だこれは。奇跡なのか。

シャーリク ナイフにフォーク。

熊 きのこがあるぞ。それに魚が焼いてある。どうして焼いたりするんだ。時間の無駄じゃないか。生のままどうまいのに。おばさん。おばさん。来てー。奇跡が起こってるよー。

(ヴァシリーサ、登場。)

熊 おばさん、ほら。テーブルに、ナイフとフォーク。それに料理！

(ヴァシリーサ、テーブルに近づく。)

ヴァシリーサ 本当！ 奇跡ね。それもびつたりのタイミング。カタフェーイさん！ 誰なの、私達のことをこんなに心配してくれたのは。どうして黙ってるの？ あなた見張りをしていたんでしょう？ 知ってる筈よ。まさか、うたたね？

カタフェーイ まあ、おばさん。まづテーブルについて。

遠慮なく食べて。ちゃんと見てましたよ。用意してくれた人は。まだその人は遠くには行っていません。僕達が喜んでいのをきくと眺めていますよ。

シャーリク じゃ、あのイヴァ

(カタフェーイ、こっそりシャーリクの足を踏んづける。イ

ヴァー又シユカ、かん木の中で、頭を抱える。)

ヴァシリーサ(シャーリクに。)今何て言った？ イヴァ？

シャーリク なー・・・

カタフェーイ そう。それが名前。イヴァムール・ムルムラーエヴィツチですよ。あの優しい、優しい、魔法使いの。

ヴァシリーサ ムルムラーエヴィツチ？ 聞いたことがないわ。

熊(料理をほお張りながら。)おばさん、早く食べた、食べた。早く食べないと、みんななくなっちゃうよ。どんどん食べてくださいよ。おおい、君達も食べるよ。

シャーリク テーブルから？

熊 食べるよ。訊くことはないよ。

シャーリク 殴られない？

熊 今日は特別。(テーブルからを許す。)殴ったりしない。

ヴァシリーサ(テーブルについて。)イヴァムール・ムルムラーエヴィツチねえ。魔法使いの・・・聞いたことがないわ。そんな名前初めてだわ。

カタフェーイ ムール・ムールですよ、おばさん。年とつた魔法使いもいますがね、よく知られた・・・でも若い奴だっているんですからね。このイヴァムール・ムルムラーエヴィツチつてのは、まだほんの小猫で・・・

ヴァシリーサ で、どんな格好してるの？ その子。

カタフェーイ 恐ろしい顔。片方のほっぺたが黒、もう片方が白。鼻は汚れたねずみ色。足にはポツポツと斑点。こいつは歩けないんです。

熊 歩けない？

カタフェーイ 歩けない。ただ走って、跳びはねるだけ。

そしてその強さ、百年も立っていた頑丈な塀、それをちよんちよんとつつく、するとぐしゃっと・・・

熊 爪は？

カタフェーイ ある。それも取り外しがきく爪なんだ。普段はボケツトの中。その爪で魚を釣るんだ。

熊 空を飛ぶ？

カタフェーイ 時々ね。パーツと走って、ちょこんとかがんで、パツと飛び上がる。陽気で勇敢で・・・ただ、身体を洗うのを嫌がるんだ。その代わりに泳ぐのが好きでね。唇が青くなっても水から出てきやしない。それから、人を好きになるとね、とことん好きになるタイプ。おばさんの仕事ぶりをよく見てましたね。その見てた目つきを見て欲しかったな。おばさんが言う言葉をね、いちいち繰り返して呟くんだ。いや、気のいい魔法使いですよ。

ヴァシリールサ 魔法使いが作った料理にしては作り方が下手ね、これ。魚だつて焼き過ぎのところも、半生(はんなま)のところもあるし・・・

カタフェーイ まだ子猫ですからね。

ヴァシリールサ (テーブルから立ち上がって。) ねえ、イヴァムール・ムルムラーエウィッチ、私の声、聞こえるかい？ ご馳走、有難うよ、イヴァムール。それからね、これも言うておこう。あんたがまだ子猫ちゃんならね、自分のママから遠く離れたりしちゃいけないよ。何か困った事が起こったら、すぐママを呼ぶんだ。すぐママは来てくれるからね。フェージャ、エゴールシユカ。お前達も聞こえるね？

フォードル 聞こえるよ、ママ。

エゴールシユカ 僕達黙ってたのはね、風が吹くのを邪魔したくなかったんだ。

フォードル 風に風車の羽根を元気よく回して貰いたかったんだ。

たんだ。

ヴァシリールサ フェージャ、エゴールシユカ！ ああ、私、今日は目を覚ますとすぐ仕事にからなくなっちゃならなかった。二人と話をする暇がなかったわ。寝過ぎしてしまった。すぐ仕事に取りかからなくちゃ。年がら年中こまねずみのように走り回る。これがママの運命ね。憤慨しないで。お前達に小言を言ったかも知れない。でもそれは疲れていた為。怒らないでね。勿論一緒に遊んでやりたい。冗談を言ったり、歌を歌ってやつたりしたいの。でも何時だってだめ。持って生まれた星なのね。そう。今は一生懸命働いて、お前達の自由を勝ち取るの。そして手を取り合って家に帰るの。そして今度家に帰ったら心ゆくまで話しましょう。お前達のこと、必ず救ってやるからね。安心して！ 心配することないからね！

エゴールシユカ ママ、ママ！

フォードル 僕達、ママに憤慨しただろうか。

エゴールシユカ 憤慨だなんて。大好きなんだ。

ヴァシリールサ さてと。準備万端整った。残っているのは、鶏小屋の掃除だけ。これはすぐ終わる筈。カタフェーイさん！ シャーリク！ さあ、川の方へ行きましょう。そこへ小屋を追い込むの。

熊 僕は？

ヴァシリールサ 貴方はここで見張り。眠っちゃ駄目よ。

熊 眠る？ 僕が？ まさか。今はもう冬じゃないんですよ。

ヴァシリールサ 石鹸にたわしを持って。それに大、小のブラシと帚(ほうき)・・・さあ、出発！

(ヴァシリイサ、シャーリク、カタフェーイ、退場。熊、残る。)

熊 眠るだつて？ この僕が？ モルモットだよ、眠りの名人は。アホな奴。それからふくろつ。あいつは昼に眠るんだ。熊はね、(あくび) 眠りはしない。確かに一晩中働いたさ。うん。(あくび) 働いたな。その後、食った。ああ、よく食ったなあ。少し横になりたい気分だ。歌でも歌うか。

(鼻歌を歌う。)

眠るんだ、熊君。

不格好な足の、

毛深い、素敵な熊君……

あ、この歌じゃまずい。妙な気分だなあ。ママの傍で、洞穴の中で、気持よく……ママと……えーと……むにやむにや……(居眠り。)

(イヴァーヌシユカ、走って登場。)

イヴァーヌシユカ そうだ、言わないこつぢやない。ちゃんと予感がしたんだ。ママの傍にこつそりついていようと想着て、まづ川で身体を洗ってからと行きかけた拍子に、ふつと後片付けを忘れていたことに気がついた。走って帰ってみれば、ほら。見張りはちゃんと居眠りさ。おい、ミハイー口さん！ 起きるんだ！

(熊、ピクリともしない。)

イヴァーヌシユカ 盗まれちゃうぞ！

(熊、いびきをかく。)

イヴァーヌシユカ どうしたらいいんだ。くすぐってやるか。

(くすぐる。熊、小さな声で笑う。しかし起きない。)

イヴァーヌシユカ 起きないな。水を汲んで来て頭からぶっかけようか。(森の方へ走る。)

あ、行っちゃ駄目だ。誰か来る！

(バーバ・ヤガー、森から抜き足差し足で登場。)

イヴァーヌシユカ バーバ・ヤガーだ。(漕(かん)木に隠れる。)

バーバ・ヤガー あーあ、可哀相なこの私。天涯孤独のこの私。どうしたものかな。今度の女中は良い女中。どうやら良い女中らしいぞ。だけどそれが困ったことなんだ。この女中もガミガミ叱るのか。下らないことに難癖をつけて責めるのか。(因果なこの私。しかしそうかと言って) まさかこの私、ひきがえるのこの私、が、自分の使っている女中、そんな奴を褒めるわけにはいかないし。えーい、そんなこと²⁰があつてたまるか。恐ろしいまむしのこの私が。褒めてなんかやるか。フン、悪賢い狐だ、この私は。約束の時より前にこつそり帰って来たとは頭がいいぞ。(また元通り、) めっちゃめっちゃにしておいてやるか。熊の奴は寝ている。これじゃ大砲が鳴ったって、目が覚めやしない。うん。この金の袋を一つ盗んでおくか。後であれを出せと言ってやればいいんだ。

(金の袋の方に進む。イヴァーヌシユカ、茂みから彼女の前に跳びだす。バーバ・ヤガー、驚いて跳び退く。)

バーバ・ヤガー 何だ、この怪物は。三百年この森に住んでいるが、こんな物は初めてだぞ。何者だ、お前は。

イヴァーヌシユカ 俺は魔法使いだ。小猫、イヴァートル・ムルムラーエヴィツチだ。

バーバ・ヤガー 魔法使い？

イヴァー又シユカ そつだ。

(バーバ・ヤガー、一步踏み出す。イヴァー又シユカ、ポケットから笛を出す。)

イヴァー又シユカ 近寄るな。(笛を鋭く鳴らす。)

バーバ・ヤガー やめる。耳が痛い。

イヴァー又シユカ 近寄るな。近寄らないで話だ。お互いに魔法使いだろ。近寄る必要はない。

バーバ・ヤガー 何だ、この怪物。なんだか気になるじゃないか。子供の格好をしている癖に、このヤガーを怖がらない。弱そうな様子をしている癖に、ピーと音をたてたりする。それにあの顔。苦手だな。見たくもない。おい、イヴァー！

お前が魔法使いだと、この私に証明出来るか。

イヴァー又シユカ 俺から離れようとしてみるんだな。こちらに引き戻してみせてやる。

バーバ・ヤガー お前がこの私を？ 引き戻す？ 出来る筈がない。

イヴァー又シユカ じゃ、行ってみな。やってみればいだろう。

(バーバ・ヤガー、行きかける。イヴァー又シユカ、ポケットから、釣針とおもりのついた釣糸を出し、振り回して後ろから投げる。釣針、服の後ろに掛かる。バーバ・ヤガーを自分の方に引っ張る。ヤガー、もがく。)

イヴァー又シユカ 行くんじゃない！ なまらずだって逃げられなかつたんだ。

(弛めたり、引っ張ったりして、バーバ・ヤガーを自分の方

へ引き寄せる。釣針をはずして、さっと脇へ跳び退く。)

イヴァー又シユカ ほらね。

バーバ・ヤガー なら、これが出来るか？(指を鳴らす。火花が飛ぶ。)

イヴァー又シユカ そのくらいのこと。(ポケットから、火打ち石を出し、打つ。火花、バーバ・ヤガーのよりも明るい。)

バーバ・ヤガー いいか。あそこの松に松傘があるだろう？

イヴァー又シユカ あるよ。

バーバ・ヤガー フー。フー。(吹く。松傘、地面に落ちる。)

イヴァー又シユカ ほら、あの松傘を見て。ほら、もっと高い、ずっと高いあれを！(ポケットからパチンコを取りだし、石を飛ばす。松傘、落ちる。)

バーバ・ヤガー 私を怒らせるんじゃないよ。お前なんか、半分に噛み切っちゃうんだからね。

イヴァー又シユカ 何を。歯が折れるだけさ。

バーバ・ヤガー この歯がか？ いいか、見てろ！(地面から石を取り上げる。)

いいか、石だぞ。(半分に噛み切る。)

見たか。石だつてこの通りだ、お前を噛み切るくらい何でもない。

イヴァー又シユカ 今度はこつちのやることを見るんだ。(地面から石を取り、それをこつそり胡桃と取り替える。胡桃を噛んで食べる。)

見たか。噛み切るだけじゃない。食べただろう。お前を食べるのもわけはない。

バーバ・ヤガー 何だ、一体これは！ こんなのは見たこ

とがないぞ。いつだって、誰だって、わしの前へ出れば震え上がるもんだ。このイヴァムールの奴、わしの前でただへらへら、ケロケロ。まさかこの辺りでわしの実権がなくなつたんじゃないだろつな。まさか、まさか。こいつは腕力だけさ。智恵じゃ負ける筈がない。今のところはこれまでで、イヴァムール。今回はわしの負けだ。(消える。)

イヴァーヌシユカ(笑う。)(こいつはいいや。しょつちゅう僕は「顔を洗いなさい、顔を洗いなさい。」って言われている。だけど顔を洗つたらどうなる。バーバ・ヤガーを驚かせることなんか出来はしない。「ポケットに物を詰め込んだら駄目。」っていつも言われている。だけど詰め込んでいなかったらどうなる？ 笛とか釣針であいつを負かすことなんか出来はしない。)

(バーバ・ヤガー、イヴァーヌシユカの後ろで身体、大きくなる。)

イヴァーヌシユカ 子供だ子供だって僕のことを言うけど、僕は結局熊より強いじゃないか。熊君は寝てる。そして僕なんだ、バーバ・ヤガーに立ち向かつたのは。

バーバ・ヤガー そしてヤガーはここにいる。(イヴァーヌシユカを捕まえる。)

イヴァーヌシユカ ママ。ママ、ママ！
(ヴァシリールサ、走って登場。)

ヴァシリールサ 私はここよ、イヴァーヌシユカ！ 放すんだ、私の子供を、バーバ・ヤガー！

バーバ・ヤガー 放せとは馬鹿なことを！ この私は獲物を掴んだら放しはしない！

ヴァシリールサ 放せ。放さないか。(刀をさつと抜き、バーバ・ヤガーの頭上に振り上げる。)(この刀に見覚えがあるだろう。蛇のガリイニツチの頭から切り取つたんだ。バーバ・ヤガー、お前もこれが最期だ。覚悟しろ！

バーバ・ヤガー(イヴァーヌシユカを放し、服のひだから刀を抜く。曲がつた、黒い刀。)(わしはお利口だ。普段はこっそり後ろからやつつけるんだがね。時には真正面から闘うこともあるのさ。)

(闘う。刀から火花が飛ぶ。ヴァシリールサ、バーバ・ヤガーの刀をはじき飛ばす。)

バーバ・ヤガー 私を殺してみる。お前の子供は永久にみつからないぞ。

ヴァシリールサ 言え。子供はどこだ。
バーバ・ヤガー 死んでも言うもんか。私は頑固でね。自

分の身が減びても意志は通すのさ。

(ヴァシリールサ、刀を下ろす。)

バーバ・ヤガー ふん、それでいいんだ。褒める時が教える時なんだからな。お前だつて分かる筈だ。自分の主人に手を振り上げるような召使いを主人が一体褒めるものかどうか。

ヴァシリールサ 私を褒めないでいられる訳がない。言い付けられたことは全部やつたんだからね。

バーバ・ヤガー 厚かましい召使いだ。そんな奴を褒めなきゃならない規則などありはしない。小麦をひいたじやないか、と言うのか。子供だつて出来るさ、こんなこと。おい、小麦粉の袋達！ さつさと納屋に入るんだ。

(小麦粉の袋、生き物のように自分で走り退場。)

バーバ・ヤガー 宝をうまく捜せたと思ってるだろう。だがな、あんなことは土方なら誰だって出来る。おい、宝、元に戻るんだ！

(金の入った袋、地中に見えなくなる。)

バーバ・ヤガー まだまだだ。褒めるには値しないぞ。別の仕事を言い付けよう。それが出来れば褒めてやる。

ヴァシリーサ 早く言え！

バーバ・ヤガー ちょっと考える。心の準備をしておくんだな。すぐ来て言い付ける。(消える。)

イヴァーヌシユカ ママ！

ヴァシリーサ イヴァーヌシユカ！

(抱き合う。カタフェーイとシャーリクが茂みから出て来る。)
シャーリク そうそう。充分に再会を喜んで。僕らが見張ってるから。

イヴァーヌシユカ ママ！ ママ、僕は三年辛抱した。それから急に悲しくなったんだ。外に出て自分の腕を試さなくっちゃ。そうも思った。それでママを捜しに出かけたんだよ。僕のこと、怒ってる？

ヴァシリーサ カタフェーイさん。シャーリク。バケツに熱いお湯を汲んで来て。それから堅いブラシと。

(カタフェーイとシャーリク、走り退場。)

イヴァーヌシユカ ねえ、ママ。ただけなんだ、こんなに汚れてるのは。僕はね、ママ、身体は毎日、どんなことがあっても洗って綺麗にしていたんだから・・・身体だけじゃないよ、必ず家中を綺麗にしていたんだ。ママの言い付け通り、掃除はしたんだから。ゴミをただ長持ちだとか、押し入れに

突っ込むだけ、そんなんじゃないよ。ちゃんとやっただよ。

それから出て来た時には床だつてきちん磨いて来たんだ。

ヴァシリーサ さつき悲しくなつたつて言つた？

イヴァーヌシユカ うん。特に日が暮れて来るとね。それから誕生日。誕生日にはねママ、僕、きちんと立って自分に「おめでとうございます」つて言つた。でも何かが足りないよね。そうだよ、ママ。それからいちこのケーキを焼くんだ。でも楽しくないよ。

ヴァシリーサ 病気は？

イヴァーヌシユカ 一度だけ。ケーキが生焼けだったんだけど、悲しいもんだから、みんな食べちゃつた。(それでおなかを。)

ただそれだけだったよ、病気は。(カタフェーイとシャーリク、湯の入ったバケツとブラシを持って来る。)

ヴァシリーサ あのやぶの後ろにおいて頂戴 さあ、イヴァーヌシユカ、洗って上げますからね。

イヴァーヌシユカ 僕、自分でやる！

ヴァシリーサ 駄目！ さあ、行きましよう。

イヴァーヌシユカ(藪の後ろで。)ママ、熱いよ。分かつた、我慢する。だつて英雄なんだから・・・だけど我慢するのがこんなことじゃ・・・あつ・・・あついよ！ あ、耳に水が入つた。

ヴァシリーサ 入る訳ないでしょ。そんな気がするだけ。

イヴァーヌシユカ ママ、僕、首は綺麗なんだよ。

ヴァシリーサ 駄目。そんな気がするだけ。

シャーリク 可哀相に。赤ん坊だ。

カタフェーイ 可哀相じゃないよ。幸せな、だ。今でも思
い出すなあ。僕のママもよく毛を舐めてくれたよ。痒いとこ
ろを噛んでくれたりね。

ヴァシリイサ さあ、これでおしまい。

(やぶからイヴァーヌシユカを導き出す。イヴァーヌシユカ、
ピカピカに光っている。)

ヴァシリイサ さあ、これで家にいる時と同じね。ちょっ
と動かないで。肩のところが破けている。繕いますからね。

イヴァーヌシユカ バーバ・ヤガーだ。(あいつが噛んだ
んだな。)

(ヴァシリイサ、針と糸を出し、縫う。)

ヴァシリイサ 動かないの。刺しちゃうよ。

イヴァーヌシユカ 嬉しくて動くんた、ママ。だってこの
三年間、僕のことかまってくれる人は誰もいなかったんだ。

それで今突然僕のシャツを繕ってくれる人が現われたんだ。
ああ、縫い目が細かいな。(自分の肩を覗く。)

ヴァシリイサ 駄目、横目を使っちゃ。すが目になるよ。

(訳註 この辺りヴァシリイサ、こっそり涙を拭いている。)

イヴァーヌシユカ 横目を使っちゃいけないよ、ママ。まっ
すぐ見てるよ。僕が縫うと小舟みたいに反り返っちゃう。マ
マ、うまいなあ。糸の目がまっすぐだ。僕の服は必ず小さな

つぎがあたっているな。僕のこと、怒ってない?

ヴァシリイサ 怒る? どっして? いい子だよ、お前は。

イヴァーヌシユカ じゃあどうしてそんな、怒った顔して
るの?

ヴァシリイサ そりやお前達がしょっちゅういけない事を

するからだよ。でも怒っているんじゃない。心配しているの。
お前の兄さん達のことをね。今はバーバ・ヤガーに捕まっ
ているんだから。何もかも奇麗にやって、褒められるばかりに
なっていた。あれで褒めない訳にはいかない筈。そしたら急
に風向きが変わって・・・

イヴァーヌシユカ ママ!

ヴァシリイサ お前達は何でも独り占めしようとする。何
でも一人でやろうとする。それじゃ駄目だよ。仲良く一緒に
闘うから勝てるんだ。団結するのよ。苛められている人を助
けるの。小さいけどお前は勇敢。智恵もあるわ。一緒にいて
私を助けて頂戴。勿論大きくなったらひとりだちしていいの
よ。

熊(飛び出して来て。)大変だ。おまわりさん! とられ
た! 小麦粉も、金もない。どうしよう。どうしてこんなこ
とに。何が何だか分からないよ。僕は見張ってたんだ。一秒
だって、片目だって、閉じたことないんだ。それなのにこん
なことに。

ヴァシリイサ 嘆くことないのよ、ミハイロさん。誰も
盗んだんじゃないの。バーバ・ヤガーが帰って来て、自分の
宝物を片付けただけ。

熊 どうして僕、それを見なかったんだろ?

ヴァシリイサ ちよつと眠っていたからよ。

熊 そうか。じゃ僕、起きてるっていう夢を見ていたんだ!
カタフェーイ っ。バーバ・ヤガーだ。走ってやって来
る。

(バーバ・ヤガー、登場。)

バーバ・ヤガー お前に新しい仕事を考えてやったぞ。
ヴァシリイサ どんな仕事だ、それは。

バーバ・ヤガー 子供達をどこに隠したか、それを捜すんだ。捜せたら褒めてやろう。捜せなかったら、自分を責めるんだな。まあわしが罰を与えた方がいい。私は主人、お前は女中、それなのに、お前みたいな女中ごときと刀でわたりあつたんだからな。考えてもみる。私にとつてそれがどんな屈辱だったか。何を笑っている。石に変えてやるぞ。

熊 変えられるもんか。棒立ちになつてなきや変えられないんだ。だけどこの人、お前を怖がつてなんかいないからな。

バーバ・ヤガー 黙れ。足曲がりの召使い！ 黙らないと酷いことになるぞ。

熊 僕に怒鳴るんじゃない。もう召使いじゃないんだ。

バーバ・ヤガー よいよい、お前とは後で話をつけよう。

どうだ、ヴァシリイサ。自分の子供を捜すのか、捜さないのか、どうなんだ。

ヴァシリイサ 捜す。

バーバ・ヤガー よし、それなら期限をつけるぞ。日の沈むまでだ。

熊 何だつて？ 日が沈むまで？ あれを見る。もう沈みかけているつていうのに。

バーバ・ヤガー うるさい。沈みかけているから言っているんだ。いいか、ヴァシリイサ、一、二の三！ さあ、捜せ！

見つかつたら私を呼ぶんだ。

(バーバ・ヤガー、退場。)

ヴァシリイサ さあみんな、捜して。私はちよつと考える。

ふとそんな気がしたんだけど、本当にそうかしら。ただの気のせいかしら。

(全員そこを捜す。ヴァシリイサ、立つて考えている。)

エゴールシユカ イヴァーヌシユカ、僕らはここなんだ。

フョードル ニヤーオ、ニヤーオ、ニヤーオ。ここだ、カタフェーイ。

エゴールシユカ シャーリク、シャーリク！ ワン、ワン。

フョードル ここだよ、ここなんだ！

エゴールシユカ 違つんだよ、ミハイロ。上の方を見るんだ。

(突然遠くから声が聞こえる。「ママー、おい、ママー、早くー。こつちだよー。こつちなんだ。黒い沼の方なんだよー。」)

熊 あ、あそこだ。

エゴールシユカ 違つんだよ、ママー！

フョードル バーバ・ヤガーなんだ。バーバ・ヤガーが呼んでるんだ。

エゴールシユカ 誰の声でも真似られるんだよ、バーバ・ヤガーは。

熊 何してるの、おばさん！ 日が沈んじゃうよ。早く沼の方へ行こう。

ヴァシリイサ 待つてミハイロ、もう少し聞いてみましよう。

(遠くから声「ママー！ お願ひ、僕達ここだよ。谷間の古いかしの木の下なんだよ。」)

シャーリク ワン、ワン。古いかしの木がある谷間。確か

にあるよ。あそこなんだ。

(遠くから声。「ママ、早く。バーバ・ヤガーが刀をふりかざしてこっちへ来るよ。」)

ヴァシリイサ さあこつちだ。(茂みの中へ急いで入る。

帰って来て。) やつと分かったわ、あの子達がどこにいるか。

バーバ・ヤガー! 子供達の居場所が分かったぞ!

(バーバ・ヤガー、地面から生えて出て来たかのように現われる。)

バーバ・ヤガー どこに居る?

ヴァシリイサ (楓を指指して。) 見るんだ、あれを。あれが何か分かるか。

(楓の葉が涙で覆われていて、沈んで行く太陽の光で輝いている。)

ヴァシリイサ あれは何かと訊いているのだ。

バーバ・ヤガー 訊くことが何かあるのか。楓じゃないか。

ヴァシリイサ それが何故泣いているのだ。

バーバ・ヤガー 泣く? 露じゃないか。

ヴァシリイサ 違うぞ、バーバ・ヤガー。騙そうつたつてそつはいかない。あの露の正体が何か、私にはちゃんと分かっている。

(楓の木に近づく。)

ヴァシリイサ 何を泣いているんだい、お前達。お前達が葉をさらさら言わせる音で、もう昨日から分かっていたわ。

その音で私の心は何故かなごんだのもの。私があんなバーバ・ヤガーの作り声に騙されるとでも思ったの? 私はわざとここを離れたの。お前達が充分涙を流せるようにね。ちよっ

と行ってただけ。エゴールシユカ、フョードル、お前達、随

分泣いたのね。それでママは助かった。(その涙で確信が持てたの。) もう泣かなくていいのよ。子供じゃないでしょう?

英雄なんでしょう? もう泣くのはおやめなさい。ママは

ここ。お前達を放っておきはしない。このまま逃げたりはし

ない。必ず元の姿に戻してやる。(安心おし。) 見るんだ、

バーバ・ヤガー。涙が止つただろう。あれは私の子供なんだ。

バーバ・ヤガー そうだ。よく分かったな。

熊 ええつ? あれが子供。何度僕はこの傍を通つたらう。

何度背中が痒(かゆ)いとここで擦つたらう。だけど何も気が

つかなかつた。許してね、君達、この熊を。

ヴァシリイサ さあ、バーバ・ヤガー、約束だぞ。

バーバ・ヤガー 約束? 何の。

ヴァシリイサ 子供達を放してくれる約束だつた筈だ。

バーバ・ヤガー ハツ、呆れた。何を考えることやら。あ

れをまた動くようにさせる? せつかく木になっているじゃないか。いたづらはしない、言うことはよくきく。こつそり家

出などしないし、汚い言葉で口答えもしない。

イヴァーヌシユカ このペテン師!

バーバ・ヤガー 褒めてくれて有難う。勿論私はペテン師。

そうだよ、ヴァシリイサ、喜ぶのはまだ早い。だいたい世の中

で、良い人間が悪い人間より上に立つなんてことがあると思

っているのか。この私は蛇さ。いつだつて人間を騙してきた。

いいか、ヴァシリイサ、もう一つ仕事を与えよう。こいつ

つをやリ遂げれば、ひよつとすると子供を返してやるかもし

れん。

ヴァシリイサ 何でも言ってみるんだ!

バーバ・ヤガー 急ぐことはない。そうだ。朝になれば文殊の智慧と言っからな。あしたの朝にする。

(バーバ・ヤガー、消える。)

ヴァシリイサ さあ、どんどん薪を焚いて、子供達を守ってやらなくちゃ。バーバ・ヤガーの毒牙にかからないように。今度は寝たら駄目よ。

熊 寝ません。寝ませんよ。眠るなんてどうしてこの僕が。

ヴァシリイサ 歌を歌ってあげますからね。

カタフェーイ お話を話してきかせるよ。

イヴァーヌシユカ 夏の夜は短いよ。すぐ朝になるから。

(みんなで枯枝を拾い、焚火を作る。ヴァシリイサ、歌つ。)

ヴァシリイサ

フェーチャ、フェーチャ、泣かないで。

エゴールシユカ、お前もよ。

ほら、ママがやって来たんだから。

ママは蜜を持って来た。

きれいなシャツも、新しい長靴も。

洗ってやろう、子供達。

こごつぱりとさせなくちゃ。

さあ食事だよ、子供達。

お腹がすいているんだろつ。

さあ、履物だよ、子供達。

足が痛くないように。

さあ、帰ろう、

イヴァーヌシユカを連れて、

それからフォードルも。

その手をひいて。

そしてエゴールシユカも、

その腰に手をやって。

子供達、お前達を、

必ず家に連れて帰る。

フェーチャ、フェーチャ、泣かないで。

エゴールシユカも泣くんじゃない。

ママがここに来たんじゃないの、

お前達を助けるために。

(幕)

第三幕

(第一幕と同じ場面。夜明けが近い。焚火あり。ヴァシリイサ、楓の木の傍に立って、心配そうに眺めている。)

ヴァシリイサ どうしたの、そんなに震えて。何か不吉な予感があるの? 風に悪い便りでも? 答えて、思い切って

口に出して。ママは分かるかも知れないんだから。

エゴールシユカ ママ、ママ、森が鳴ってるのが聞こえる?

フォードル 森の木が鳴ってるんだ。みんな一つのことしか

言っていないだよ。

エゴールシユカ 「兄弟の楓、可哀相な楓」って。

フォードル 「用心しろー用心しろよー」って。

エゴールシユカ 「バーバ・ヤガーが小屋を出たよー」

フョードル 「手に恐ろしい武器を持つてるよー。恐ろしい武器だよー」

エゴールシユカ 「まさかりに鋸、鋸にまさかりだよー」

ヴァシリイサ お前達の言葉は分からないけど、これだけははつきりしている。怖いんだね、お前達。大丈夫だよ。ね、大丈夫。夜明けのちよつと前は私だつて気味悪い。暗くつて、寒くつて。沼の上にはもやがかかつて。でも（もう少し。だから）辛抱して。すぐお日様が上がる。本当よ。お日様はちゃんと自分の仕事を知っている。そう、バーバ・ヤガーはね、私達が一晚中監視していたんだから。そして今はね、何か悪いいたずらをしていないか、皆で調べているところ。

（熊、走つて登場。）

熊 バーバ・ヤガーが消えちゃった！

ヴァシリイサ 消えたつて？ どういうこと？

熊 バーバ・ヤガーが小屋から出たんです。手には……あ、フョードルとエゴールシユカの前では、これを言うのはまずいな。とにかく小屋から出たんです。僕らは後をつけた。そしたらピヨンと跳んで……消えちゃった。もやが消えるみたいにね。それと一緒に手にもった鋸もまさかりも……（みんな消えたんだ。）だから急いでここにお手伝い出来ればと思つて。シャリークはあいつの後をつけて行つた。犬には関係ないですからね、姿が見えようと見えまいと。消えようと消えまいと。シャリークは追跡中ですよ。決してまかれたりしませんよ。彼なら大丈夫。

（シャリーク、走つて登場。）

シャリーク おばさん、おばさん、僕を殴つて。ほら、棒も持つて来た。

熊 え？ 何だい？ どんな悪いことをしたんだい。

シャリーク まかれちゃったんだ。ヤガーの奴、僕を沼の方に連れて行つたんだ。あそこはこつちにも水、あつちにも水。（水でにおいが消えちゃつて）うまくまかれてしまったんです。でも大丈夫。カタフェーイがいます。じつと岸辺に身をひそめて……生きてるか死んでるか分からないくらい……そして耳をそばだてているんです。ヤガーのことをねずみみたいに待ち伏せしていますから。僕は急いで帰つて来ました。おばさんに叱つて貰おうと思つて。

ヴァシリイサ 叱つたりなんかしないわよ。で、バーバ・ヤガーはかくれ帽子を持つてるの？

熊 持つてるんですよ。古くつて、ぼろぼろのやつなんですけどね。けちなもんだから新しいのを買わないでいるんです。でも明け方とかたそがれ時とか、そういう薄暗い所ではかなり効き目があるんですよ。ねえ、おばさん、大丈夫ですよ。かくれ帽子なんか怖くはありません。あのカタフェーイがヤガーの奴を逃がしはしませんよ！

（カタフェーイ、音もなくヴァシリイサの足元に登場。）

カタフェーイ 消えちゃった。

熊 消えた？

カタフェーイ どうしようもないや。消えちゃったんだ。

ヴァシリイサ それで、イヴァーヌシユカは？

カタフェーイ その話は後！

熊 じゃ、今は何をやるつていうんだ？ 泣く？

カタフェーイ 泣く？ どうして。

熊 だって他に何が出来るんだ、この哀れな我々に。

カタフェーイ おはなしを話すんだ。

熊 おはなし？ 何の役に立つんだい。

カタフェーイ 何も分かってない奴がそんなことを言うんだ。おばさん、ヴァシリーサおばさん！ 僕の周りに輪になつて坐るよう皆に言つて下さいよ。

ヴァシリーサ さあ、みんな。猫さんの言う通りにして。

カタフェーイ ほら、おばさんもだよ。

(全員楓の周りに坐る。カタフェーイは真ん中。)

カタフェーイ さあ、耳をすまして聞いてくれよ。この話にはねえ、ちゃんと目的があるんだからね。(いいかい？) あるところに樵(きこり)が住んでいました。

熊 あるところって、どこ？ この森？

カタフェーイ 近所にだよ。

熊 あ、僕はその人、見たことないな。噂しか知らないよ。

虫みたいな顔、見たらむずむずするような顔だつて聞いたけど……

カタフェーイ どうして話の腰を折るんだい。何でそんなことを訊くんだ。

熊 僕はバーバ・ヤガーを逃がしたもんだから、あれからみんな僕に辛くあたるんだ、みんな僕と話したくないのか。

僕はそれが知りたいよ。

カタフェーイ 私だつてヤガーを逃がしているんだよ。

熊 猫さんには誰も文句は言わないんだ。怖いからね。だけど僕には平気なんだ。僕はみなしごだからね。僕は身分が

低いからね。

カタフェーイ 分かった、分かった。怒ってなんかいないつてば。だから黙つて聞いて。口を挟まないで。あるところにきこりが住んでいました。本当に人のよいきこりで、欲しいと言われれば何でもやってしまふ。さてある冬のこと、このきこり、森から帰ると帽子がない。妻がきこりに訊きました。

「あなた、帽子はどうしたの。」「可哀相な年寄がいてね、その人にあげたんだ。貧しくて凍えていたんだよ。」「あらそう。年寄の人にこの寒さ。帽子はいるわね。」「丁度この言葉が出たその瞬間、家の前で音がした。シャンシャンシャンと鈴の音。ポクポクポクと馬の足音。キュッキュッキュツとそりの音。そしてかぼそい声が言いました。」「開けて、開けて。身体を暖めさせて下さいな。」「きこりは扉を開けました。まあ何ていう奇跡でしょう。外を見ると小猫くらいのお馬が、銀の蹄(ひづめ)をつけた足で扉を叩いているじゃない。そして銀の鈴が、シャンシャンシャンと鳴っている。そりは小屋に入ってくる。銅でできたそり。その上にきこりの帽子がのつている。その帽子の中に、ほら、僕のこの足、これぐらいの大きさの子供がちょこんと。優しそうな、楽しそうな、子供が。」「お前は誰？」「僕はルタニユーシユカ。あなたの息子。善行を施したご褒美なんだ。」「きこり夫妻の喜びといたら……

シャーリク(飛び上がる。)

カタフェーイ さあ、捜そう、捜そう、捜そう。

シャーリク(訳註) くんくんやって。(ヤガーのやつが来た！ 忍び足でこっそり。)

カタフェーイ そうか、それなら、捜すんだ、捜すんだ。
シャーリク あ、間違いだった。(違つにおいだ。)

カタフェーイ 何だ間違いか。それなら、いいかい？ もう邪魔はしないで。それで三人は暮らしたんだ。きこりとその妻、それに息子のルタニューシユカ。その子供の働きぶりといったら・・・自分の小馬に乗って暖炉の中の重い鉄釜だつて運ぶ。ねずみは追い払う。春になると畠を耕す。自分の大きさに合わせて鎌を作つて羊の毛を刈る。牧場いっぱい、羊を追いかけて、サツサツ、チャツチャツ・・・毛はほとんど刈られてゆく。ルタニューシユカの名前は森中に響き渡つたんだ。ところが近所に意地悪な魔法使いが住んでいてね、考えた。「このルタニューシユカを手に入れられないかな。普通の人間と同じくらい働いて、食べるのはほんの少しだ。」魔法使いは空高く舞い上がり、ルタニューシユカの森に下りてきた。「おい、きこり、私に子供をよこすんだ。」「渡すものか。」「よこすんだ。よこせ、よこせ。」「渡すものか。」「それなら殺すぞ。」この言葉が口から出たかと思つてもなく、ルタニューシユカが武装した馬に乗つて、魔法使いの足元に跳びだした。そしてカラカラと大笑い。魔法使いが剣をさつとふりおろす。しかし、はずれ。ルタニューシユカは小さく、はしっこい。一日中魔法使いと闘つたが、やつつけられない。反対に、ルタニューシユカの方が、槍でチクリ、チクリ。暗くなると今度は木に登つて待っている。下を通つた時、頭の上にドスン。ふり払おうとした魔法使い、今度は思いきり自分の額をガツン。ついに地面にのびちゃった。ほうほうの体(てい)で家に帰つた魔法使い、それからはル

タニューシユカの森には決して近づきませんでしたとき。

熊 その魔法使いの名前、何ていうんだい？ この森でも、似たようなのがあるように思うけどね。

カタフェーイ 名前はね・・・バーバ・ヤガー。

バーバ・ヤガー(姿は見せずに。)嘘だ！

(その声がした場所にイヴァー又シユカ、突進。跳びはねて、空中から何かを掴む。するとすぐ、舞台上にバーバ・ヤガーが現われる。イヴァー又シユカ、両手にかくれ帽子を持って踊り跳ねる。バーバ・ヤガー、イヴァー又シユカに襲いかかる。)

ヴァシリーサ 早く！ かくれ帽子を被るの！

(イヴァー又シユカ、被ろうとする。しかしバーバ・ヤガーが早くて間に合わない。二人、帽子を掴んで引つ張りあう。帽子は古くて半分にちぎれる。バーバ・ヤガーとイヴァー又シユカ、勢い余つてしりもちをつきそうになる。その時、まさかりと鋸を落とす。ヴァシリーサ、その時まで近づいていて、うまくそれを取り上げる。)

バーバ・ヤガー 変なことが起こっているもんだ、この私の家じゃあ。眠つていなきゃならないんだ、召使いどもは。それが何だ、一緒に集まつて主人の品定めなどしおる。まあいい。このルタニューシユカの話はもう一度聞くことにする。お前らみんなに災いが降り掛かるように。私は堪忍袋の緒が切れているんだ。(退場。)

イヴァー又シユカ はっはっは。ねえ、ママ、うまくいったらう？ カタフェーイさんと僕が考えついたんだ。僕らは湖から帰つてきた。バーバ・ヤガーは僕らのあとをつけてきたんだ。猫さんはそれからおはなしを話し始めた。僕は数に

隠れて息をひそめていたんだ。猫さんは話を続ける。僕はずつと息をひそめる。そしたらあいつ声を出した。待つてましたと飛び掛かる。絵に描いたようにうまくいったな。残念だったのはあのかくれ帽子。あれを被ることに気がついていなかった。家に帰った時だって、役に立つもん、隠れんぼの時でもいいや、僕昨日よりは役に立った。そうだよな、ママ。

ヴァシリイサ そうよ、イヴァーヌシユカ。

(太陽が登る。朝日が野原を照らす。)

ヴァシリイサ ほらね。フエーチャ、エゴールシユカ、言った通りでしょう？ 太陽が上がって、もやが消えたら、明るいでしょう？ 気分も明るくなった。どうして黙ってるの？ ぼうや達。何か言ってみよ！

フョードル ママ、ママには分からないだろうな、こんな朝に同じ場所でじっと立っているのが子供にはどんなに辛いか。

エゴールシユカ ママには分からないだろうな。みんなが僕のために働いて、みんなが僕のために闘っている、その時に、(一歩も動けないで)釘づけになっている、それがどんなに辛いかな。

ヴァシリイサ 悲しまないでね。もう少しの辛抱よ。もう少しで楽にして上げますからね。

(舞台裏でバーバ・ヤガーの苛立った声がある。「馬鹿どりめ！ 進め！ (進まないよ)足をちょん切って、スーブのだしにとってやるぞ。そうすりゃ少しは分かるだろう。」)

(とり足の小屋、登場。バーバ・ヤガーがのっている。開いた扉から、長椅子にふんぞりかえっているのが見える。)

バーバ・ヤガー もっと景気よく進むんだ、とり足！ さあ、なみあし・・・止め！

(とり足の小屋、止る。)

バーバ・ヤガー ああ、疲れた！

熊 何が疲れただ。いつでも他人に仕事をさせておいて。

バーバ・ヤガー やれやれ、分かっている奴の言うことといったら！ 他人に仕事をさせて生きてゆくのが楽だとお前は思っているんだな。何もしないのが、砂糖のように甘いことだと、お前は思っているんだ。いいか、私も小さい頃は学校に行った。娘・ヤガーの頃な。いつときだつて私には心休まる時などありはしなかった。お前の兄貴などいい気なものさ。前の日習ったことを全部暗記して、後はぐっすり眠ればいい。私は違う。可哀相な子供のヤガー。一日中のらくら過ごして、そのらくららの間だつて考えている。明日どうやつて切り抜けようかと、その方法を。生きている間中こうさ。

お前達は単純な働き手。正直に働いて、歌を歌って・・・幸せなものさ。こつちはいつだつて苦心惨憺。何もしないで王様の暮らしをどうやってやるうかと、そればかり。可哀相なこのヤガー。それで一体どうするか。沼の上を走り回り、刀を振り回し、他人に働いて貰わなきゃならないのさ。そうだな、ヴァシリイサ、お前に何をやらせよつか。

ヴァシリイサ さつさと決めるんだ、バーバ・ヤガー。

バーバ・ヤガー 名案が、浮かんだ、浮かんだ、浮かんだぞ。簡単にすむ仕事を今度はやって貰おう。けちをつけるのも簡単だからな。いいか、あの小屋を見るんだ。窓は頑丈なものだ。あの格子じゃあ、この私だつて忍びこめはしない。

丸太は堅い木で、まさかりを使つたつて、こつぱ一つ出やしない。しかし錠がない。錠を作つてくれないか。ひよつとすると褒めてやるかもしれないぞ。やるか？

ヴァシリールサ やりましょう。

バーバ・ヤガー 始めるんだな。私はゆつくりと鏡でも眺めていよう。(鏡を見る。)おお、おお、可愛い、大事な、お前さん。ウー、チュチュチュ。お前ちゃん、ドンナシユバラシイコト、カンガエチユキマチタカ？ あら、錠前を作らチエルの？ ウー、チュチュチュ。

ヴァシリールサ あ、熊さん、この鉄の棒を二つに折つてね。

熊 がつてんだ。

ヴァシリールサ それからイヴァーヌシユカ、あなたはこれにかんなをかけて。

イヴァーヌシユカ はい、ママ。

ヴァシリールサ それからカタフェーイさん、あなたはこの鉄の輪を磨いてね。

カタフェーイ よし、まかせて下さい。

ヴァシリールサ それからシャーリク、あなたはバーバ・ヤガーが逃げないように見張つてるのよ。

バーバ・ヤガー 私はどこへも行く気はないよ。外もいけど家にいるのもいい。みんなが働くのを眺める・・・か。そんなことをするのはこれは初めてだ。いつだつて物が出来上がったから、私はおでましになるんだからね。イヴァーヌシユカが手に持つているその箱は何というものだい？

ヴァシリールサ 鉋(かんな)。

バーバ・ヤガー そこから出てくる白いリボンは何だい？

そいつを売るのはかい？

ヴァシリールサ あれは鉋くず。

熊 そんな神妙な様子をして騙そうつたつて、そうはいかないぞ。まさかりと鋸を(こつそり)手に取るうとしてるんだ。分かつてるんだぞ！

バーバ・ヤガー そうさ。切り倒したり、ぶつ壊したり、私のおはこだからね。名譽ある行為というものさ、これが。物をこしらえる・・・こんなことは名譽ある行為じゃない。お前達が私にやつてくれる行為に過ぎないのさ。その手に持つている細い棒は何なんだい？

ヴァシリールサ これはやすり。

バーバ・ヤガー やれやれ、よくやるね。ああ、可哀相な、可哀相な人間！ 何故お前達は働くんだい？

ヴァシリールサ そのうち分かるさ。

バーバ・ヤガー まだ子供のことを助けようと思つていいのかい？

ヴァシリールサ そつ。

バーバ・ヤガー 子供達を愛している？

ヴァシリールサ そつ。勿論。

バーバ・ヤガー で、三人のうち、誰が一番？

ヴァシリールサ 時によつて違う。その時に私を一番必要としてる子供、それを愛す。フョードルが病気になる。すると、治るまでは鼻肩はフョードル。イヴァーヌシユカに困つたことが起きる。抜け出るまでは鼻肩はイヴァーヌシユカ。お前には分からないかな。

熊 おばさん、こいつに分かる訳ないんだよ。

バーバ・ヤガー それはよく分かる。分かり易い原則じゃないか。ただどうも分らないことがある。子供っていうやつに、どうしてうんざりしないのか。朝から晩まで、むやみに付きまとって、うるさいことばかり言っじゃないか。私だつたらな、ヴァシリーサ、とくに子供なんか、窓からポイさ。

ヴァシリーサ やっぱりお前はバーバ・ヤガー。人間じゃない。だからそんなことが言えるのさ。小さい子供がむやみに付きまとつ。むやみになんか付きまとつ訳がない。本当に困っているからママを呼ぶんだ。「ママ、助けて！」って。そして助けてやった時の子供の笑顔！ 母親にはその笑顔さえあれば、他には何もいらぬのさ。

バーバ・ヤガー そして子供が少し大きくなって、智恵でもつてみる。わがままでお前を困らせるんだ。ちつとも言うことをききはしないのさ。いくら可愛がつてやつたつて、子供はお前に口答えばかり。私ならね、そんな奴、すぐ家から追い出してしまふ。

ヴァシリーサ だからお前はバーバ・ヤガー。人間じゃないのさ。あの口答えだつて心の底には優しい言葉が隠されている。ただ悪い言葉がつい、口から出てしまうのさ。だから我慢してやらなくちゃ。出来た！ さあこれで出来上がり！ 扉にしっかりと錠がついた。

バーバ・ヤガー なんだか馬鹿に早いな。すぐ壊れるんじゃないのか。

ヴァシリーサ まづ試してからにするんだな、悪態は。(扉を閉める。)

(錠が音をたてて下りる。バーバ・ヤガーは小屋の中。)

ヴァシリーサ 錠の下りる音。いい音だろう？

バーバ・ヤガー 何がいい音か。え？ 何だつて？ やつた、だと？ 馬鹿なことを言うんじゃない。この私が褒め言葉を口に出したとでもいうのかい。

ヴァシリーサ きつと褒めることになるよ。どうにもしようがなくてね。

バーバ・ヤガー はっはっは。

ヴァシリーサ 何を笑っている。錠はちゃんと出来ているんだ。試しに出てみたらいい。

バーバ・ヤガー (扉を引つ張る。) 何だこれは。けしからん。閉じ込めたな。

ヴァシリーサ そうさ、閉じ込めたのさ。錠はなかなか良い出来だろう。

バーバ・ヤガー いい出来であるもんか。

ヴァシリーサ それなら開く筈だ。さあ、出てみたらいい。(小屋中が震える。バーバ・ヤガー、唸り声を上げる。頭が窓から見える。)

バーバ・ヤガー ヴァシリーサ、開ける。命令だ。

ヴァシリーサ 良い出来だろう？

バーバ・ヤガー 良い出来だろうと、知るか。褒めてはやらん！

ヴァシリーサ それならそのまま小屋にいるんだな。唸るのも、もがくのも止めた方がいい。丸太からはこつぱ一つ出やしない。頑丈に作られているんだ。

バーバ・ヤガー とり足！ この女を踏み潰せ！

(とり足、躊(ためら)う。しかしその場を動かさない。)

バーバ・ヤガー さあ、やれ！

(とり足、動かない。)

熊 とり足はもう動かないとき。

バーバ・ヤガー 何故だ。

熊 あんたにはね、随分長いこと仕えたんだがね、一度だって優しい言葉をかけて貰ったことがない。だけどここのヴァシリサお婆さんはね、人間に話し掛けるように言葉をかけて、歌まで歌ってやったのさ。

バーバ・ヤガー いいか、ヴァシリサ、もしお前が私を出してくれなかつたら、恐ろしい不幸がお前に降り掛かってくるんだ。昔のおとぎ話のどれにも出ていないような。今まで誰にも書かれなかつたような。

ヴァシリサ 何だその不幸とは。

バーバ・ヤガー 悲しんで私が病気になる。

熊 あんなの嘘だからね。病気になるかなりやしない。

バーバ・ヤガー ヴァシリサ、お前なんかすぐ殺せる。

お前はどうかやっただってこの私には勝てっこないんだ。勝ちは私にあるんだ。

ヴァシリサ あるものか。お前は一生のうち、箱一つ作ったことがない。籠一つ編んだことがない。草花一つ育てたことがない。お話一つ考えついたことがない。歌一つ歌ったことがない。お前はただ、人から盗んだり、ぶつ壊したり、人をぶつたりするだけ。それでどうして人間と比べられるって言うの。

バーバ・ヤガー おーい、リユダエート・リユダエーディッチ！ 来てくれ、すぐに！ 悪い奴がいじめられてる。私がい

じめられてるんだ。助けてくれ！

熊 あいつが来てくれるわけないだろ！ あいつとはたつた二カペイカのことだ喧嘩して、この森から追い出しちゃったじゃないか。リユダエートの家来で残っているのは蚊だけ。蚊じゃあたいして恐ろしくもない。

バーバ・ヤガー ヴェージマ！ おい、ヴェージマ！ 来てくれ、すぐに！ 助けてくれ！

熊 あの魔女とも、端金(はしたがね)で喧嘩したじゃないか。

バーバ・ヤガー ヴァシリサ、お前、何が欲しいんだ。

ヴァシリサ 子供達を自由の身に。

バーバ・ヤガー してやるもんか！ 駄目、駄目、駄目。

この世の終わりまで、ああやって並んで二人立っているんだ。

お前の言う事なんか、聞いてやるもんか。

ヴァシリサ 聞くようになるさ！

バーバ・ヤガー 何が！

ヴァシリサ とり足！ 沼へ出発だ。一番深いところへ・
・進め！

(とり足、従順に歩き始める。)

バーバ・ヤガー おい、どうした、とり足！ そんなことをしたら、お前達も死んでしまっぞ。

とり足 私達は大丈夫。なんといいても鳥は鳥。うまく逃げろ。

バーバ・ヤガー ヴァシリサ！ 引返すよう言ってくれ。

ヴァシリサ トットトットトット。

(とり足、戻る。)

バーバ・ヤガー ヴァシリールサ！ 仲直りしよう。

ヴァシリールサ じゃあ、子供達を自由の身に。

バーバ・ヤガー もっとこっちへ来るんだ。こっそり話がある。

ヴァシリールサ みんなの前で言っただ。

バーバ・ヤガー 恥ずかしい。

ヴァシリールサ 柄でもない。言っただ。

バーバ・ヤガー 自由の身にするのは・・・私にや・・・出来ないんだ。

ヴァシリールサ 嘘をつくな。

バーバ・ヤガー この私の大切な健康にかけてもいい。楓に変えたのは、私じゃないんだ。ヴェージマ・・・私の友達のあの魔女なんだ。三力ペイカ、あいつは私に借りがあったからね。

熊 おばさん、この話は本当なんだ。

エゴールシユカ そう。年とつたおばあさん。胡桃(くるみ)の木の杖をついて、いつもバーバ・ヤガーと二人でいた。

ヴァシリールサ とり足！ 沼へ進め！

バーバ・ヤガー 待って、待って。自由の身に自分では出来ない。でもやり方は知っている。

ヴァシリールサ 早く言っただ！

バーバ・ヤガー まっすぐ東に進むんだ。南にも北にも曲がらないで、まっすぐ、まっすぐ。分かったな！ すると沼に出る。沼も気にしない。まっすぐ進む。すると海が現われる。海も構わずまっすぐ進む。船でもいい(海を渡るんだ。)！

まっすぐ進まなきゃ、道に迷うんだからな。まっすぐ船で

行くと浜辺に出る。その浜辺の右手の方に、大きな森。この森の三倍はあるな。そして木の葉は緑じゃない。白いんだ。

白い、それに灰色。それぐらい古い森なんだ。その古い森の真ん中に、丘がある。全体が白い草で覆われている丘だが、

その中に洞窟がある。その洞窟に入ると、奥に白い大きな石がある。その石をどけるんだ。すると下が井戸になっている。

その井戸の水・・・それは沸き立っている。ぐつぐつ音を立てている。まるで熱湯のようだ。そして自分で光を放っている。その水を飲んで来るのだ。そして楓に注いでやればいい。

たちまち楓は元の子供に戻る。さあ、これで話は終わり。ああ、疲れた。自分以外のことで、こんなに長い話をしたなんて、生まれて初めてだ。いつもするのは自分の話。この可愛い子ちゃんのこの私。

ヴァシリールサ どのくらいかかるんだ、そこまで。

バーバ・ヤガー 少なくとも一年。

(フォードルとエゴールシユカ、叫び声を上げる。)

ヴァシリールサ 嘘を言っただ。

熊 いいえ、これは嘘じゃありません。おお、嬉しい。

(はっはっはと大笑いする。) おお、悲しい。(泣く。)

ヴァシリールサ 熊さん、どうしたの。

熊 落ち着いたらお話します。

バーバ・ヤガー さあ、行くだ、ヴァシリールサ。時間はどんどん過ぎていくぞ。

ヴァシリールサ お前も一緒に連れて行くだ。

バーバ・ヤガー とり足の小屋は森なんか通り抜けられな

いだろ。私をここから出すんだ。それでいいじゃないか。
（訳註 以下独り言らしい。）どうせ一人で行かなきゃならないんだ。行くのに一年、帰るのに一年。二年間に何が起きるか知れたもんじゃない。これは思う壺かも知れないぞ。
（訳註 大きな声で。）行くんだ。さっさと出発するんだ。何をぐずぐずしている！

ヴァシリイサ 待て。みんなとちよっと相談してみる。
（小屋を離れ、仲間のところへ行く。）熊さん、あなたどうしたの？ 笑ったと思ったら泣いたり、泣いたと思ったら笑ったり。

熊 はっはっは、ウエーン、ウエーン、ウエーン。助かる方法が目の前にあるっていうのに、それに手が届かない。

ヴァシリイサ どうして？

熊 おばさん、聞いて。今・・・はっはっは、話すから。ウエーン、ウエーン。筋道を立てて。大蛇のガルイニツチと僕のおじいさんの話はしたよね。（訳註 七頁参照。）面白半分、あいつ、僕のおじいさんに、通りががりさま、急に火を吹きかけたんだ。

ヴァシリイサ 聞いたわ、その話。

熊 それが大火傷だった。それで僕の親父、ミハイロヴィッチ（とうさん）がね、すぐさまその洞窟に取りに行ったんだ。その命の水を取りに。もう全速力でね。その頃は僕らは、その洞窟の近くに住んでいたんだ。はっはっは、ウエーン、ウエーン、ウエーン。

イヴァーヌシユカ 早くその先を話してくれよ。はらはらどきどきじゃないか。

熊 バケツにいっぱい命の水を汲んで、親父は帰って来た。だけど悲しいことにね、おじいさんはもう息が切れていた。親戚中が集まっていて、泣いてた。森もまるで秋だ。しんと静まりかえっている。（それでも）親父はおじいさんに命の水を振り掛けた。なんていう奇跡なんだ。焼け焦げていた毛は、一本一本新しく伸び、止っていた心臓が打ち始めた。そして若い熊みたいに立ち上がったかと思うと、はっくしよーんと一つしたんだよ。森中が声を上げたね。おめでとぅって。はっはっは、ウエーン、ウエーン、ウエーン。

シャーリク 泣かないでくれよ、もう。でないと吠えるよ。

ヴァシリイサ で、その先は？

熊 その時に使った命の水の残りがあって、水差しに入れて、それからずととってあるんです。はっはっは！

ヴァシリイサ その水差しはそれで、どこに？

熊 長持ちに入れて・・・はっはっは。

ヴァシリイサ その長持ちは？

熊 バーバ・ヤガーの小屋の中。暖炉の傍にいつも置いてある。僕が勝手に逃げ出さないように。あれを取っておけば大丈夫って。ウエーン、ウエーン。

ヴァシリイサ じゃ、鍵をあげて、取りに行かなくちゃ！

カタフェーイ 駄目です！ 鼠取りにかかった鼠を逃がすようなものです。うまい方法があります。私がかっそり屋根に登って、煙突から中に忍び込むんです。そしてこっそり盗んで帰って来る。

熊 ヤガーの奴に感ずかれちゃうよ。

シャーリク 大丈夫。僕があいつをからかって、怒らせる。

そうすりや何も聞こえない。

(猫、消える。シャーリック、小屋に向かって吠える。)

シャーリック バーバ・ヤガー、お前、犬の言葉が分かるな
どと自慢してたことがあったな。

バーバ・ヤガー 勿論犬語は分かるさ。喧嘩の時に、これ
ぐらい便利な言葉はないからな。それからな、言っとくが、
この私ぐらい喧嘩の好きなものはいないんだ。

シャーリック ガウー、ガウー、ガウー。分かるか、これが
どういう意味か。

バーバ・ヤガー 簡単じゃないか。「御主人様、あそこに、
松の木の上に、りすがいますよ。」

シャーリック ヘエー、よく分かったな。これはどうだ。
(吠える。)

バーバ・ヤガー 「こつちへ来い。尻尾を咬んでやる。」
シャーリック これは？ (吠える。)

バーバ・ヤガー なんだと？ いやな犬だ。
シャーリック なあんだ、分かってないじゃないか。

バーバ・ヤガー 嫌なことを言う犬じゃないか、お前は。
私が鳩よりも優しいだなどと。よくもこんなことを言ってく
れたな。(吠える。)

(シャーリック、吠え声でこれに答える。お互いに怒り、吠え
合う。雄犬がワンワン、キャンキャン、言い合う声。)

バーバ・ヤガー (突然吠えるのを止めて。) 泥棒！ おま
わりさーん！ (消える。)

(小屋の中からミヤーミヤー言う声。猫のカーツという脅し
の声。キャツと言う声。それから沈黙。)

シャーリック ワンワン。カタフェーイさん死んじゃった。
ワンワン。

イヴァーヌシユカ ああ、僕が行かなきゃいけないかったん
だ。

熊 煙突からはもぐり込めないでしょう？ 悪いのはみん
なこの僕なんだ。僕がいけなかつた。何故水差しを長持ち
になんか入れたんだ。

フォードル 僕らはその場に立つたまま。動くことも出来
ない。

シャーリック ワンワン！ あいつのこと、ひどく罵ってやつ
たんだ。「天使様」なんて言ってるね。だけど駄目だった。ワ
ンワン！

イヴァーヌシユカ ちよつと待って。ひよつとすると猫さん、
まだ生きてピンピンしているかもしれない。ミヤウー、ミヤ
ウー！
(答なし。)

イヴァーヌシユカ 可哀相に。カタフェーイさん。
ヴァシリサ ちよつと待って。そうそう、忘れていたわ。

あの猫さんつたら、「ミヤウー、ミヤウー」っていう言葉も
知らなかつたんじゃないかしら。見識の高い猫さんなんだも
の、あの猫。・・・カタフェーイさん！

(屋根の上から声。「ムール」)

熊 生きてる！
シャーリック どうして出て来ないんだい。皆心配してるじゃ
ないか。

カタフェーイ(屋根から顔は出さずに。毛を整えている

最中。煤で汚れているからね。

熊 死んじゃったのかと思つたんだよ、僕らは。

カタフェーイ(屋根から。)うん。もう少しで尻尾を切られるところだった。しかしうまく躲(かわ)した。

(屋根から飛び降りる。足に大きな水差し。)

ヴァシリーサ これがその水差し? 熊さん。

熊 そう。これなんです。

バーバ・ヤガー(窓から。)どうせ気が抜けてるさ。役に立つもんか。

エゴールシュカ ママ!

ヴァシリーサ さあ皆、ちよつと離れて。

(全員脇に退く。ヴァシリーサ、楓に近づく。水差し、布がまいてある。それに堅い栓。ヴァシリーサ、栓を抜く。青い炎が上がる。)

バーバ・ヤガー くそつ。気が抜けていなかったか。

(ヴァシリーサ、楓に命の水をかける。たちまち楓、消え、青みがかった霧(もや)がたちこめる。微かに、地面の下の方から、音楽が響く。その音楽、だんだんと明瞭に、陽気になる。霧、消える。楓、消えている。野原に、同じくらい背のたけの子供二人、立っている。二人ともイヴァーヌシユカに似ている。二人、目をぱちくりさせている。今眠りから覚めたかのような顔。突然ヴァシリーサに気づく。二人、叫ぶ。「ママ!」)

ヴァシリーサ (二人を抱きしめて。)ああ、フョードル!

エゴールシュカ!

カタフェーイ 安心して喜んで! 安心して。今はもう誰

一人、指一本触れさせはしない。

エゴールシュカ イヴァーヌシユカ!

フョードル イヴァーヌシユカ!(弟を抱きしめる。)

ヴァシリーサ ああ、これで三人。三人揃ったね。家を出て行った時と全然変わらぬ。一日分も大きくなっていないわね。

フョードル ママ! 僕達これからは大きくなるよ。

エゴールシュカ 一日一日とじゃなくて、一時間一時間と大きくなるよ。

フョードル ママ、行こう。行こうよ。僕ら、あまり同じ

ところに立っていたもんだから・・・

エゴールシュカ もう同じところに立っていたくないんだ。

さようなら、松君達、杉君達。怒らないでね、僕達家に帰るんだ。

木達(さらさらと小さな音を出して。しかし、言葉は明瞭に。)さようなら、さようなら、楓君達。僕達怒ってなんかいないよ。でも僕らが生きているんだってこと、忘れないでね。これから家に帰っても、僕らが使う言葉、忘れないでね。フョードル 忘れない。安心して!

バーバ・ヤガー ぺちやくちや、ぺちやくちや、うるさい

おしゃべり! この私の目の前で、よくまあ厚かましくやつてくれる! いいか、私はね、人が喜んでるのを見るとむしろ腹が立ってくるんだ。さあ、早くここから出さなんだ!

ヴァシリーサ 出さない! 私達は帰ります。お前も一緒

だ。そして家に帰ってから、お前をどうするか、皆で決めるんだ。

バーバ・ヤガー 止めてくれ、それは。持っている金は全部やる。それは止めてくれ。

ヴァシリイサ 駄目！ さあ、みんな手を！

(全員、手に手を取り合う。)

ヴァシリイサ さあ、出発！ とり足、続け！

(全員進む。小屋も後に続く。)

カタフェーイ さて、これでお話はおしまい。この話分かった人は偉いんだよ！

(幕)

一九五三年

平成五年(一九九三年)六月十日 訳了

<http://www.aozora.gr.jp> 「熊美」の項 又中、

<http://www.01.246.ne.jp/~tnouni/nouni1/default.html>

日本における著作権管理代行者…

INTERNATIONAL PATENT TRADING CO. LTD

(IPTC)

21-2 ZHOME KIBA KOTO-KU TOKYO, JAPAN

135-0042 Tel: 03-3630-8537

これは、文法を重視した翻訳であり、上演用のものではありません。

上記芝居 (Dva Klena) の日本訳の上演は、必ず国際パテント貿易株式会社(上記住所)へ申請してください。

Shvarts Plays The Trustees of the Shvarts Trust
ロンドン著作権協会 (RAO) RUSSIAN AUTHORS' SOCIETY
(RAO)

6A, B, Bronnaya St., Moscow, 103870